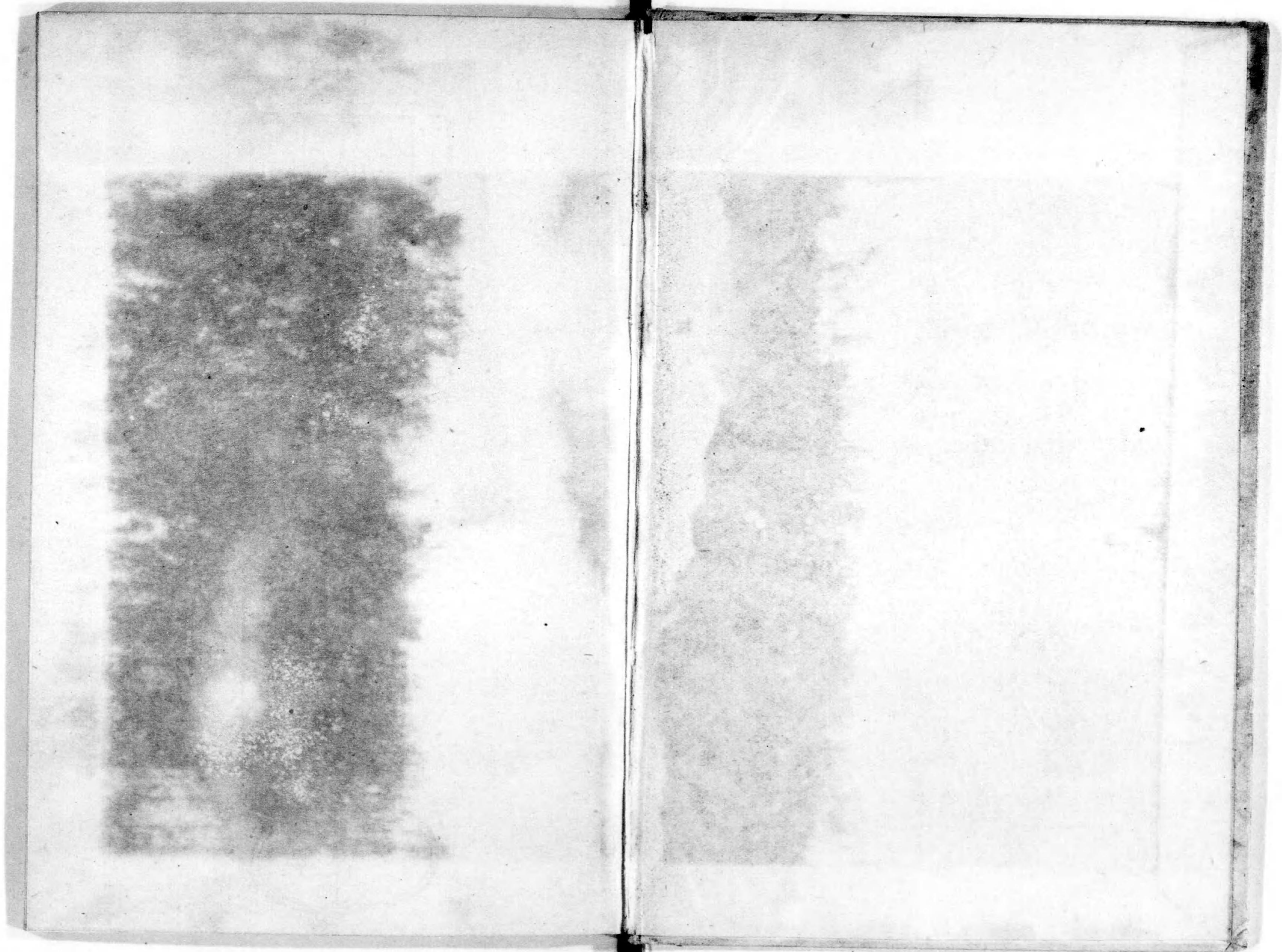




0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>19</sup>/<sub>m</sub> 1 2 3 4 5

始



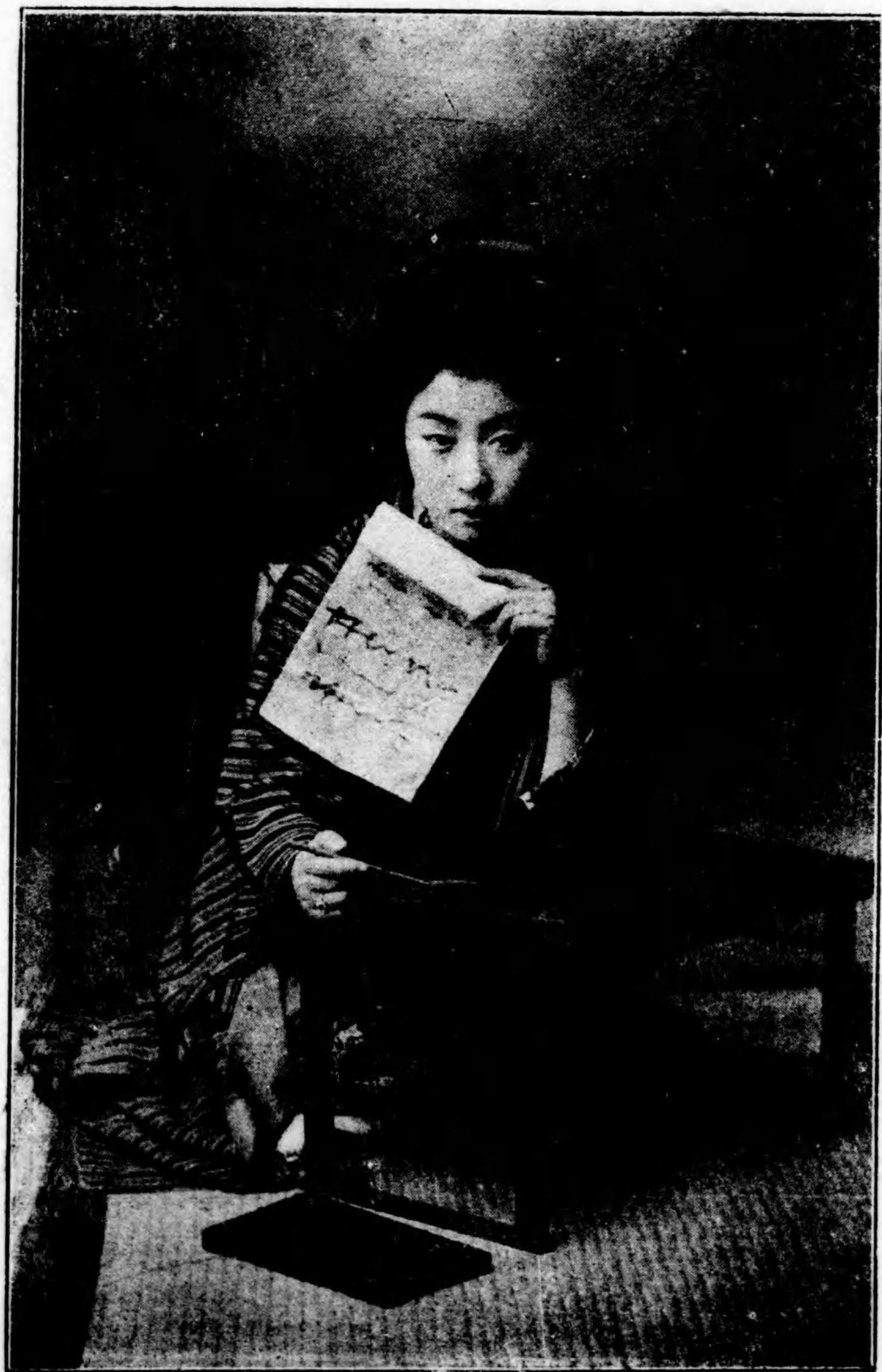


特102  
465



即席  
筆  
力催眠術秘傳

大正  
9. 12. 16  
内交



筆力催眠術實地應用



筆力催眠術師利川

はしがき

催眠術は、近代科學に立脚せる、眞に合理なるアート(術)である。  
催眠術は、宇宙萬有を吞吐し、人類生活を活殺する、不可思議極まる靈力である。

故に催眠術は、眞理であり、組織的であり、かの迷信的豫言、かの迷信的精神療法等と全く其類を異にする。殊に近時、醫界の有力なる新智識が、又學界知名の心理學者其他が著しく之に着目し、而して此研究に没頭し、或は又其治療法に、之を加味し、とり分け法醫學上の難解なる諸問題が、之に依て釋然解決されるが如きは、實に怖るべき驚異といはねばならぬ。同時に催眠術の普及、催眠術の民衆化は、今

や隠れもなき事實であつて、都鄙共に此智識の多少ない人のない程、世は催眠術の實益化を認めて來た。之が爲多くの催眠術會、催眠術講習會、同傳習所めくものが出來、又之と同一目的に出づる汗牛充棟の出版物はあるが、未だ會て「筆力催眠術」なる、筆力専門に催眠を説きし、斯術宣傳の良書なるものが全くない。即ち本書は、此要求を充すべく世に公されたものである。

已に題して筆力催眠術と云ふ。然れども、實は美文の極致、其文の粹を以て人を感激恍惚たらしめて、さうして催眠状態に入らしむる事を、學理と、實驗から細大力説したるものである。此の如きは則ち本會獨得の創造的研究であつて、聊か確信の誇りを有つものである。茲に一言を卷頭に題して、此はしがきとする。

大正九年秋、月明三五の夜、滿地の虫韻  
宛ら夢の國に似たるが如き處にて

著者識す

利用席 筆力催眠術秘傳

目次

第一章 催眠術の解説……………一

精神萬能力——宇宙のエーテル——心理學上の一大發見——天然催眠——誘導催眠——催眠術は——人工——誘導催眠也——

第二章 催眠に入る順序……………四

心理的催眠——奇妙なる催眠劑——知覺的催眠——視覺的聽覺的觸覺的催眠——生理的催眠——麻痺的催眠——催眠術の善用惡用

第三章 催眠術の效果……………八

千里眼も催眠術の一種——藥物治療の缺陷——補充不言の教訓  
——遠隔催眠——メシメリズム——磁力の應用——以心傳心——  
莊子の天道篇——古人の糟粕——直覺力——心靈交通——筆力  
催眠の效果——天下無敵縱橫無碍

#### 第四章 筆力催眠の實質……………二五

文字は一種の印象——文字驅使の巧拙——健筆家必ずしも筆力  
催眠の功者でない——手紙に感動する情熱——拙文の功率——  
誠實のない虚飾の文——筆力催眠の實質は誠實本位——平家物  
語の名文——鬼作左と筆力催眠

#### 第五章 筆力催眠の捷徑……………三

筆力催眠は如何にせば有効か——警句の使用——侮辱に近い文  
字を避ける——文字をより美しく書く——餘情を言外に含めよ  
——相手にわるい感じを與へるな——根強い印象

#### 第六章 文字の靈感力……………二五

其人の眞性の閃き——實力の人が非實力の人か——自己の自然  
性を文字力で美化せよ——筆力催眠術の三要點——人間の先天  
性——第一感の先入主——文字から其容貌迄分る——愕く可き  
運筆心理——聯想に訴へる美感

#### 第七章 弱點を刺す一句……………二九

心臓に刺すメスの力——文字が對手の眼に映する刹那——感極  
つて悶絶——威力を増す引立役の文字——感動に堪へざる昏睡  
——怖る可き一句の威力——人を心の奥底から動す——筆力催  
眠術唯一の秘訣

#### 第八章 青年に對する筆力催眠……………三三

青年の切實なる慾望——青年の目標は理想——先づ彼の長所を



手紙にて賞揚せよ——受身になつて彼を釣れ——負けるは勝つ  
の眞理——推測論理の下に心酔

第九章 婦人に對する筆力催眠……………三七

婦人を感動の極泣かしめるには——情を以て説く——男子に愛  
せられるか理想——愛す可き婦人美——婦人への手紙の書きか  
た——女子は男子の強みを喜ぶ——婦人の自尊心を毀けるな

第十章 暗示と心理的影響……………四二

人は摸倣性に活きる——出歯龜——觀念運動作用——腦で考へ  
てゐる事——暗示的喝采——魅された如き放心状態

第十一章 文字暗示の方法……………四七

五つの方法——手紙一本で催眠状態——棒を呑んだ人の如く茫  
々然——數量半減が暗示

第十二章 遠隔心理及書翰術……………五三

術應用の書翰——よりよい感じを與ふる工夫——説明不十分—  
手紙の値打——書翰の技巧——技巧の上乗なるもの——術専門  
の書翰法——手紙催眠術

第十三章 文字催眠の兩極端……………五九

文の魔力——美文の極致——悪文から睡魔——筆力催眠の資格  
なき文

第十四章 宣傳催眠術……………六二

プロバガンダ——有效なる宣傳文——集約的結果——以心傳心  
の作用——宣傳文の生命

第十五章 繪畫催眠術……………六六

繪を見て惡より遷善——美感第一義でない廣告——天真人を動かす——文字通信

六

第十六章 韻文催眠術……………七〇

一切の社會……韻文——人生不可缺の生活手段……美妙、玄妙、絶妙——正氣の歌——本妻第一義——筆力に伴ふ詩才——吉田惟足の歌

第十七章 讀書催眠術……………七六

讀書催眠術の効果——催眠的速成の著者——讀書催眠にかゝつたもの——所謂「山」

第十八章 書道催眠術……………七九

漢字の強い執着心——理外の理——到る處惡筆の天地——書道

第十九章 作文上文學驅使の秘訣……………八五

催眠の萌芽——文字驅使の手段——女と金持のほめかた——漸々文字催眠にかゝる——樗牛の手紙——菅茶山の手紙——書札の文字に死活あり

第二十章 催眠的古今の名文……………九一

芭蕉の手紙——暗示的文字——紀文の手紙——一休の母の手紙——此文の眼目——多田親愛の手紙——平重盛の手紙——近衛篤麿の手紙——公の性行の超然——出資を頼む懇書——婦人に交際を求むる手紙——詩集を友に送る手紙——宣傳法批評の手紙

## 目次終

利用 筆力催眠術秘傳

帝國催眠學會

第一章 催眠術の解説

如何に物質萬能を唱へても、如何に心身二元論を唱へても、人類の生活、意志の表現は、所詮精神に歸着する。玲瓏明鏡の如き月光の美観も、雲霧彩霞の如き爛漫の花も、心目に映する一種の精神靈動でなく、何である。此意味に於て著者は、精神萬能を唱ふると共に、一切の國家——社會——人類は、常住精神に支配されて居ると云ふ事を斷

精神萬能力

催眠術の解説

宇宙間の  
エーテル

心理學上  
見の大發

言し憚らない。

元來天地間には、常に磅礴せる大氣あり、音響はそれに依て傳播せられ、而して光りと熱とは、同じく宇宙間の精氣に依て傳へらる。我々人類の五感にも、亦頗る之に似たる大氣あり、精氣あり、其結果、其能動する處に怒りを生じ、喜びを生じ、哀みを生じ、樂みを生じ、總じて動物電氣——人力磁氣と云ふやうな意味のものが隨伴し、さうして微妙なる不可思議なる、又驚異すべき現象が、刻々生れては去り生れては去る。即ち近世心理學史上の、一大發見に屬すべき「催眠術」は、則ち此實驗と、學理から出發普及して、今や醫學界に對しても、心理學界に對しても、人類の日常生活に對しても、驚く可き幾多の實益を與へて居る。

天然催眠  
誘導催眠

催眠術は  
人工誘導  
也

然らば、其催眠術とは、如何なるものかと云ふに、分つて二つになつて居る、其一是則ち天然催眠である、其二是誘導催眠である。さうして昏睡、全身強直、睡遊の三現象になつて現れる。天然催眠は著しき原因もなく、意志の作用もなくして、自然に催眠状態に入る事的事实であり、之には術と云ふ、第二、三者の云ふ如き文字を附し難い此意味から云つても、已に催眠術と云ふ以上は、人工催眠、誘導催眠でなければ、催眠術と云ふ事は出来ない。

即ち其催眠術の、人工——手段には種々の方法がある。佛國の瘋癲病醫として有名なる、シャムボール氏の如きは、之を心理作用、知覺作用、機械作用、生理作用、麻痺作用の五つに分けて居て、伊太利のラッポニ博士も、之に同意を表してゐる。

### 第二章 催眠に入る順序

心理的催眠

催眠状態には、往々にして、隠れて居る意識が、顯れてゐる意識の喚び起しによつて動き出す。之をむづかしくいへば、顯在精神が、潜在精神を活動せしむると云ふ事がいひうる。即ち深き眠に落ちたるものが、其眠慾や、種々の行動をなし、又種々の言を發するが如きは、顯在精神の暗示に依るものである。第一先づ心理作用に於ては、想像に描きつゝありし繪畫も其原因になれば、個人——施術者に對する畏敬も其原因になれば、若くは催眠状態に入る事の合理なるを自知し、確信する時は、過去、現在、未來を問はず、幾分でも左様に印象せる事に對し、些少な動機を與へれば、譯もなく催眠状態に入つてしまふ。

奇妙なる催眠劑

知覺的催眠

故に例へば、汝は繪畫の如何なるものなるかを知れりやと云ふ暗示を術者から受けし時、其術者を畏敬する心から、知らずくに、會て想像したる繪畫、若くは展覽會等の繪畫を術者の面前に述べる事がある。若くは一袋の紙包を出し、之は獨逸の某々大家の調劑にかゝる奇妙なる催眠藥なりといへば、其一言のみで被術者が、直に催眠する等の事は澤山實例がある。即ち此事實は、梅干の話をして、直に口に酸味を覚え、演劇の話をして、直に劇場の賑しき、面白き光景を聯想すると同一原理であつて、心理作用と、催眠術の關係は、實に深大極まるものがある。

又官能に刺戟を與ふる時は、大抵の人が催眠状態に入つてしまふ。勿論その催眠に速遅あり、輕重あり、其狀同一でないけれど、等しく

催眠に入る順序

是れ知覺作用の催眠と云ふ事が出来る。例へば被術者の全身に、強大なる快き電力を急に感せしむるとか、若くは強き光線を其顔面に放射せしむるとか、或は又微弱なる、朦朧たる一物體の、同一点を長く見つめさせるとか、或は又は無味乾燥なる書籍を長時間讀ましむるとか所謂誘導をしかける事に於て、催眠するを知覺作用の催眠と云ふと共に、又子守唄を歌ふて、幼兒を眠に誘ふ事實、若くは春雨の葉屋の軒の系車の音が、自然と人を眠境に誘ひ入る事實等も、同じく知覺作用の催眠といひうる。此場合に於ては、前者を視覺作用といひ。後者を聽覺作用といひたい。さうして、愉快、不愉快を問はず、非常なる疲労又は、徐々たる接觸、又は壓搾作用、若くは摩擦、寒熱の心身に與ふる影響より來る催眠を、觸覺作用と名づけたい。

視聽覺的  
催眠術

さうかと思ふと、身體の烈しき震盪より來る催眠、搖籠の如き、一種の遊動快感を與ふる催眠、臉上から眼球を壓搾し、之に輕快なマッサージを與ふる處の催眠、又は同一場所に位置せしめて、同一点を機械的に眺めさせ催眠がある。其等を悉く機械作用の催眠と名づけたい。尚其他に

生理的  
催眠術

磁力を用ゐ、電力を用ゐ、さうして催眠せしむる處の生理作用の催眠もあり、モルヒネ、コロロホルム、又は自餘の劇薬を用ゐ、又はアルコール等の酩酊物……生理機能の全く麻痺状態に入るものに依る、麻痺作用催眠等もあつて、催眠術の範圍と、此應用の領域とは、實に驚く程洪大である。

催眠術の  
善悪用

催眠に入る順序

故に催眠術は、之を悪用すれば罪惡を構成し、之を善用すれば、疾

病を癒やし、目的を達し、更に一步進んでは一種の安心立命を與へる等、之を個人としても、之を國家、社會としても、今や閑却すべからざる問題になつた。其れかあらぬか、近時投薬——手術第一義を以て精神療法的方法を輕視しむる醫界に迄、此存在が認められると共に此應用が診察にも、手術にも、投薬にも善用される、之を見ても、如何に精神萬能の人類生活であるか、知れる。

### 第三章 催眠術の效果

近年心理應用の旺盛なると共に、幾多の精神療法が勃興した。かの一時天下の耳目を聳動したる。千里眼の如きも、催眠術の一種なれば近頃世に行はるゝ心理療法、哲理療法、呼吸療法、靈子術療法、心靈

千里眼も  
催眠術の  
一種也

療法も催眠術の一種なれば、とり分け現に、社會の大問題になれる、大本教の鎮魂歸神術も、詮じつめれば、等しく催眠術の範圍を出てないものである。之を眠催眠術上からいへば、何れも洪大無邊なる、其術の一小部分なりと云ふ事が出来る。

催眠術は、此の如く、幾多の應用をうけて、各方面に亘つて、一々其名稱を異にして現れて居るが、歸する處は、他の病氣を治し、惡癖を矯正し、精神上の苦惱を除去し、而して安心立命の人たらしめると共に、藥物治療の缺陷を補充し、教育及宗教の化力の及び能はぬ處を完全に化導し、若くは宗教上に於ける靈魂問題を解決し、哲學、心理學上の疑問に對し、幾多の活ける實驗——實例を示し、又或は尋常人の眼より見て、不可思議至極なる現象として、不言の教訓靈化な與ふ

藥物治療  
の缺陷補  
充

筆力催眠術の秘傳

る等、其效果測り知る可らざるものがある。  
 然れども、單に術者と、被術者と、面前に相對して術を行ふが如きは、日進月歩の急激なる社會に於て、隔靴搔痒の憾みあり、隨つて效果の普及力、靈力の應用力が、尙々不十分と云ふ誹りあるを免れない茲に於てか、遠隔催眠——筆力催眠術——間接催眠術の必要が起つて來る。即ち此催眠術は、恰もかの空中に漂へる個々游動の電波が、かの突出せるアンテナ（受信機）に依て、その電力を集中し、而して無線電信の實を示し、相互に通信しうる結果と同じである。さうして其中には、動物磁力術と云ふものもあれば、以心傳心の、自然感應と云ふ事がある。其處で、動物磁力術と、以心傳心の事を説明する必要が起つて來る。

歐洲に於ては、紀元十三世紀の頃、アルベルタス、マグナスと云ふ哲學者があつて、先づ磁力を人身の醫療に用ゐて見た。さうして相當の効果を收めて居るが、之を尙十分に研究し、實驗した者は、和蘭のフアン、ヘルモントと云ふ博士であつた。殊にスコットランドのドクトル、マツクスヴェルは深く磁力の應用を研究し、宇宙間には一種の特別な流動氣體がある。此氣體によつて、萬物相牽引して、微妙なる關係を保つて居ると主張して以來、動物磁力説は歐洲の醫學界、心理學界を震撼した。其中でも「人は一種の眼に見えざる力を有してゐる。其れは磁力である、その磁力に依て他人の身體に迄影響を及ぼしうる」と云ふ説は、ヘルモントの主張として、かなり學界に信を置かした。即ち此メシメリズムが、後に云ふ催眠術の萌芽——遠隔催眠



以心傳心

術の萌芽であつて、支那、印度、波斯、和蘭等には、之を人身に及ぼす事の工夫が、古くから行れたからだ。

以心傳心と云ふ事は、口で之を示しえない、筆で之を傳へえないやうな……無形の心象であつて、即ち心から心へ傳へる……一種の共鳴

——交感と云ふやうな事である。昔から此事實は禪學者の悟入や、劍

道、柔道その他の藝術を、師から門人に傳へる場合等に多くあつた。

莊子の天  
道篇

莊子の天道篇にも、略ぼ之れ似通つた話がある。齊の桓公が、ある時堂上で讀書をして居た。すると其堂下で、王者の乗る車の輪を拵へる老工人があつた。讀書の聲を聞くと共に、椎鑿を棄て、堂に上り、

桓公に問ねた。あなたの讀む處のものは何ですかと。すると桓公か之

に答へて、聖人の言であると云つた。老工人尙言葉を重ねて、其聖人

古人の精

は現に生きて居りますか如何でせうか。と反問した。いや聖人は已に

死した、唯其言が残つて居ると、公か云へも果せぬに、老工人、然ら

ば君の讀む處のものは、古人の精粕で、言ふに足りぬ事だと云ふ。す

ると桓公が怒つて、寡人が讀書するのに、賤しい分際で何を云ふ。返

答によつては許さんぞと、非常な見慕で詰め寄せた。老工人一向平氣

なものだ。臣は臣の事を以て之を見て申上げるか、輪を斷り、筍を入

れるに稍寛なれば其滑で入り易いが、堅からず、稍緊しければ、苦澁

で堅持で入り難い。故に徐ならず、疾ならざるやう、其れを手にて

心に應ずる事は出来るが、之を心にする事が出来ぬ。それ故臣は臣の

子に之を傳へる事が出来ず、行事七十になるも自ら輪を斷るの勞を免

れない。古の人も之と同じく、之を今人に傳ふる事が難かつたに相違

催眠術の効果

直覺力

ない。随つて君の讀む處のものを糟粕と申上げたと云つた。術から見  
 たる以心傳心が之である。術以外の以心傳心も、此亦理外ではないけ  
 れど、多くの場合に於て、人の直覺力は、どうかすると不思議に暗合  
 する、而かも遠隔の地に在つて暗合共鳴する。況んや其人の文字を見  
 その人の文字に含まれたる心を聯想する時に於て、以心傳心の實のな  
 い事はないのである、即ち思へば思はれる、此の如き心的事象の大半  
 は、心靈の交通ともいへれば、一種の魔力——神通力ともいへば、一  
 種の催眠術——即ち筆力催眠術ともいへる。文字を以て、思想を表  
 現して座らにして目的を達する生活には、此筆力催眠術の効果の偉大  
 力を、決して輕視する事が出来ない。一管の筆よく佳人の心を捉へ、  
 一句の文字よく敵をして心服せしめ、一音信の電文よく、金策の希望

心靈交通

筆力催眠術の効果

天下無敵  
縱横無碍

を達し、一葉のはがきよく、對手の怒りを賺め、一文のプロバガンダ  
 をよく、目的を奏功して、人心の機微に觸れ、其弱點を魅して、其術よ  
 り逃るゝ能はざらしめて、殆んど催眠状態に入りし人と、同一の觀を  
 示す事になる。斯くの如きは、則ち斯術の玄妙に達したるものであつ  
 て、則ち斯術の上乗なるものである。處世上、生活上、天下無敵、  
 一切處に臨んで縱横無碍の境地を拓く事が、かくて初めて出来る。著  
 者のいふ、所謂「筆力催眠術」は、此手段と、方法とを、實驗と、學理  
 から説くと共に、其間に於て、其實例を示して、實行の可能を示すも  
 のである。

### 第四章 筆力催眠の實質

筆力催眠の實質

文字は一種の印象

文字驅使の巧拙

筆力催眠術の秘傳

文字は一種の符合である。文字は一種の代辯機關である、文字は一種の表示である、文字は一種の印象である、文字は一種のヒントである。而かも其活用は、活用者の能力如何に依て善化し、悪化し、若くは美化し、若くは醜化し、若くは聯想に訴へて、事實を意表外の邊に迄進展せしめて、又時として、事實を正反對の程度迄變換しうる底の本能力がある。さうして其極端に靈化せるものは、全く催眠術と同一の効果を示し、さうして被術者、相手を、眞に催眠状態の人たるが如き情況に陥らしめる。かくて術者の意の如く被術者が、右にも、左にも、東西南北に動く。そして其動けるものが、術者の意のまに静止する、又は其希望通りの状態にする。此の如きは無論、文字驅使上の巧拙——即ち作文力の巧拙と云ふ事になるか、果して然らば世の

健全筆家必ずしも筆力催眠術の功者でない

手紙に熱動する情感

文筆者、悉くが、筆力催眠術の大家として、其能率に於て、驚くべき公益を國家、社會、人類に與へて居らねばならぬ譯である。然るに事實は美事に之を裏ぎつて、却て文章力のない、僅に文字を驅使し、その日の日用文を書き得る底の人が、立派に筆力催眠の奏功をして居るから不思議である。即ち世に文士と稱し、又文章家を以て任ずる人の多くは、達文健筆なるに任せて、又思想の豊富なるに任せて、動もすれば事實を過大視し、事實を美化し盡して、實際と遠ざかれる虚偽を敢てして平氣である。故に真情流露、天真爛漫の至誠、測々として人を動かすやうな、心の奥底から出でて響き、血や、汗や、心臓の高鳴りせるやうな眞實が少い。手紙をうけた先方でも、先づ文章家であるから、事實をより潤飾してゐるだらうと云ふ割引觀念を以て其手

筆力催眠の實質

紙の文に對する。随つて其手紙に感動する情熱が大分減殺される。之に反して、十分文字を驅使しえない、さうして又十分自分の心はいひ現しえない程拙文の人の手紙には、何處となく、力めて不十分に書いた其裡に、力強き誠實の力が籠つて居て、其れがゆくりなくも、他の潜在精神を興起させる。さうして意外の反應力になつて現れる。現に著書の如きは、少時から文章生活に没頭して、其交る處の人の大半か、文士、學者、然らざる迄も、多くは中等以上の教育を受けし人々である故、自つと其往復文の手紙は、通常人以上に文字の驅使も又思想の表現法をうまいが、退いて考へて見るに、涙を流して感ずるやうな、眼を見張つて怒り、憤るやうな。人心を捉へて、一上一下するが如き名文、妙文、佳文、逸文に殆んど接しない。つまり長文であ

り、虚飾の多い故もあり、誠實の籠らぬと云ふ、第一感が、先づ此くの如く其手紙を輕視させるのであるか、之に反して、文章家でない、辛うして書いた、老いたる父の手紙の如き、たどくしい文章を見ると、いつも涙を流して感心する。と云ふのは、あの筆の十分まはらない人が、よく此處迄思ふ事を書いたものだ、と思ふと同時に、此處に書きえない考へ、思つて居る事か、未だどれ丈あるかと云ふ事を思ふ度、著者は此種の手紙を、文章家の手紙以上に敬重し、且つ一種の催眠状態である事を否まない。つまり筆力催眠の實質は、誠實中心である。若し思ふ事を文にすべく、筆にすべく、適當な文字の思ひ浮ばぬ時は、方言可なり俗語可なり、假名文字可なり、形状で示す意味の繪畫可なりであるから、其を其手紙中に挿入する事にする。此の如

筆力催眠術の秘傳

くして、其人と、其場合と、其事實を對手が比較して考へて、却て一層の感動を催す事がある。さうして完全な、誤りのない、文章語ですらくと書いたものよりも、よりよい効率を示す場合が少くない。例へば、かの平家物語中に於ける、

「入道相國(清盛)大床に立ちて、暫しにらまへ、あな悪くや、當家傾けうとする謀反の奴がなれる姿よ。しやつ、爰へ引き寄せよとて、椽の際へ引き寄せて、物履きながら、しやつらを、むすくとぞ踏まれける。」

の如きも、其當時の清盛の言葉そのまゝを、通常の文章語に挿入したればこそ、あの光景が、活躍して、悪々し氣なる、清盛の態度が、まさしく見える譯で、一段と人を感動させ、さうして筆力催眠の目的

によくかなつて居るといへうる。故に手紙を書くものは、強ちに其文才のない事を悔むに及ばない。又かの本多作左の

一筆啓上、火の用心、おさん泣かすな、馬肥やせ。

に至つては、武士の陣中書翰として、筆力催眠の意味からいつて、上乘なるものゝ例である。而かも語少くして、意味深長に、殊にその人の人となり、此簡潔なる文章中に活躍して見える。即ち一筆啓上は手紙の緒である、火の用心は家庭へ對する注意訓戒である、おさん泣すなは、愛する處の少女を泣かぬやうにとの頼みである。馬肥せば、武士の嗜みである、馬を大切にせよと云ふのである。しかし畜類を人間の先へ書かない處に、徳川家の勇將、鬼作左の、作文的用意の程がしのばれる。之を見ても、長文の手紙の、必ずしも上乘なもの

と限らぬ理由、むづかしい文字を使つた手紙の、必ずしも目的を達する力あるものでない事か知れやう。筆力催眠に注意する者は、よく此二つの古文を味つて貰ひたい。

### 第五章 筆力催眠の捷徑

筆力催眠術は、如何にせば、最も有効で、又如何にせば最も簡易で、又如何にせば容易に目的を達しうるか云ふに、其第一は、先づ相手の心を知る事が必要である。即ちどう云ふ事を喜ぶ人か、どう云ふ事を嫌ふ人か、又どう云ふ事を希望する人かと云ふ事を知るは、恰も彼の兵法家か、敵將の心を知つて、而して其れに應ずる戦略を籌らすと一般である。又兼ねて己れを知る事である。自分と彼れ、其關係

筆力催眠術は如何にせば有効か

用警句の使

は如何、彼れは第一自分をどう思つて居るか、自分に對して何を要求してゐるか等の事を考へて、さうしてから筆を執れば、大抵は其筆力に効果がある。然るに唯々其能文に任せて、相手の心如何も考へず、對手と自己の關係——將來、現在、過去と云ふやうな事をも考へず、に、遮二無二唯文章力で抑へつけやうとするが如きは、却て反對の結果を生ずるものである。故に此場合の方法としては、兵書の所謂、敵を知り、己れを知るの故智を學ぶ事に有效が伴つて居り、次には稀れに警句を使用する。寸鐵人を斫るやうな、聽いて直ぐ胸のすくやうな、銃練したる警句を挿入して、感動を深からしめると共に、印象を大ならしめる。しかし其濫用によつて、其威力が減退するから、此用捨も考へて欲しい。次には對手に分り易い文字を使ふといつて、餘り

筆力催眠の捷徑

侮辱に近  
い文字を  
避ける

文字をよ  
り美しく  
書く

餘情を言  
外に含め

筆力儀眼術の秘傳

に對手を輕視し、侮辱に近い文字の驅使を切に避ける事を要する。次にはより適切なる、より切實なる引證を擧げて、簡短に加味してやる。此の如きは其言はんと欲する事により力を増大して與へる事になる。其又目的を大に助長する意味になる。次には文字をより美し（書道催眠術参照）く書く、一見して美感を催して、恍惚たる程度に迄一步進めてかく。さうして文字の貧弱さを補ふ。次にはより謙遜して、先方に倣しない程度に、相當な敬語を、重複せぬやうに使用し、十分對手に満足を與ふる處の必要がある。次には十二分に云ふべき處を、先づ八九分丈いつて、あとの一二分を残して、餘情を言外に含める如くに書く。次には長文の手紙を喜ぶ人か、短文の手紙を喜ぶ人か、趣味の手紙を喜ぶ人か、實用一點張りの手紙を喜ぶ人か、又手紙にも形式を

對手にわ  
るい感じ  
を與へる

根強い印  
象

喜ぶ人か、之に反して無造作を喜ぶ人かを考へて、筆墨用紙等を選択し、對手にわるい感じを與への工夫する。さうして必要とあれば、香墨を使用し、インキを使用する等の、洋式か、和式かを區別する必要も大にあらう。さうして其最も終りに注意すべき事は、一切に於て慎重であり、禮儀を失はぬと云ふ、十分敬意の紙上へ表現するやう、文字、行間、天地、宛名の位置、脇づけ等に迄注意して、一度與へたる印象を、極めて根強く、其心に喰ひ入らせるに、全力を擧げる事が望ましい。

第六章 文字の靈感力

普通人間の性格と云ふものは、よく言語の上に現れる。動作の上に

文字の靈感力

其人の眞性の閃き

實力の人の非實力

筆力催眠術の秘傳

現れ、又書いた其文章——手紙の上に現れて、隠くさんとするも、掩はんとするも、何處かに其人の眞性の閃きが流露する。故に手紙を見れば、筆蹟を見れば、其人が飄逸なる人か、豪邁なる人か、峻嚴なる人か、奇峭なる人か、穩健なる人か、剛健なる人か、眞摯なる人か、磊落なる人か、輕薄なる人か、重厚なる人か、個人的の人か、國家的の人か、實利主義の人か、理想主義の人か、趣味の人か、無趣味の人か、信念の人か、無信念の人か、志のある人か、ない人か、無情の人か、同情ある人か、實力のある人か、ない人か、假裝せる人か、實體を示す人か、大膽なる人か、小膽なる人か、誠實の人か、虚偽の人か、事務の人か、經營の人か、社會の人か、家庭の人か、活潑なる人か、優柔なる人か、進歩的の人か、保守的の人か、獨立の人か、孤立

自己の自然性を文字で美化せよ

筆力催眠術の三要

人間の先天性

か、創業の人か、寄生の人かと云ふ事が分る。同時に其學力も、嗜好も、性癖か、何時ともなく、手紙の文字に現れる。文に巧みなるものは、力めて此癖を掩蔽すべく、自己の自然性を文字力で美化し、殆んど別人の觀あり、又第二人格を有つ人の如く裝ふ者もあるか、長い間の手紙往復に其れ等が不用意に發覺する。其うして其信用を増減し、時により、場合に依ては、實力以下に見られる事があり、此反對に實力以上に見られる事もある。要するに筆力催眠術としての三要點は、文字を美しく書く事、文章を適切に書く事、注意力を喚起し、感動力を惹起して、其記憶と、その印象か、より長時間に亘るやう書く事であらう。

元來人の先天性は、醜惡を厭ふて、善美を喜ぶ特質がある。故に他

文字の靈感力



第一感の  
先入主

文字から  
其容貌迄  
分る

愕く可き  
運筆心理

人の書ける文字を見ても、先づ其美醜を見て、第一感を享受する。さうして此先入主に依て、第二感、第三感を助長する。故に慎重を缺き面倒かれる餘りに、手紙の走り書、即ち亂筆亂文を敢てして、平然たる人の如きは、無論筆力催眠術の堂をだも覗き得ずして、一生涯中大なる損害か、間接直接に生じて来る。加之らず、人の心理状態は、文字を見て其人の性行を知り、實力を知ると共に、又其人の容貌、體質、顔面の美醜迄、殆んど想像し、而して十中の八九分迄、其正鵠に中るものが多い。即ち此の如きは、一線、一劃、一點、二點の微細部分に於ける運筆心理に、争ふ可らざる共鳴暗合のある事實である。即ち靈力にあらざるよりは、所詮及び能はざる事實であらう。筆力催眠術は、則ち此原理に由るものであつて、かの見ぬ戀にあこがるゝが如

聯想に訴  
へる美感

きも、東西相離れて朋友相慕ひ、兄弟相思ふが如きも、夫婦父子相愛するが如きも、其大半は文字の靈力に原因する。而かも文字は、現身村放れ、互に其缺陷を忘れ、若くは知らずして、通常の言語以上、敬意を表する文字の交換に依るが爲、層一層聯想に訴へる處の美感、靈感が偉大をなし、其結果、手紙を握つて其れに接吻し、或は其れを抱擁して、悲喜交々至るの極、恍然、茫然として、自づと催眠状態に近き事實に入る事がある。かくの如くして、始めて筆力萬能の實が、遂に遂げられ、達せられたと云ふ事になる。嗚呼偉なる哉筆力の權威!!  
嗚呼偉なる哉筆の靈感力!!

### 第七章 弱點を刺す一句

弱點を刺す一句

心臓に刺すメスの力  
文字が對する眼に對する刺  
感極つて悶絶

如何に千萬言を重ねても、如何に美辭麗句を陳ねても、如何に警句や、引證を澤山擧げてても、又如何に文字を綺麗に書いても、又如何に及ぶべき丈鄭重に、且つ敬意を用ゐる對手に對しても、對手が喜ぶ處の手紙は、對手の心臓に解剖刀を刺されしが如く感ぜしむるは、手紙の一句より外にない。其手紙中のより力強き、より人の弱點を衝く一句より外にない此場合の此文字は、よし多少の適切が缺いたにもせよ、其思想表現法が拙かつたにもせよ、其文字が對手の眼に映じたる刹那に、はつとする其處に、句の威力が潜んで居る。其眞に驚くものは、之を見るに等しく昏倒し催眠状態に入り、其全く怖れに沈むものは、遂に其催眠状態から絶息状態に迄陥入する。然らざれば、喜びの餘りに、手の舞ひ、足の踏み處を知らざる餘りに、感極まつて、悶絶して、稍

威力を増す引立役の文字

しばし催眠状態を持續する事がある。  
然らば、其一句は、其眼目の一句は、如何にして、何れに挿入したものが、手紙の如何なる部分に入れて、示すべきかと云ふに、成るべく中間若くは、後部に潜めおいて、相手の性行を考へた上、其れを唐突に示し、若くは漸々に示し、より能率を増進すべく工夫する。即ち此場合に於ける、他の文字は、つまり其一句の輔佐役になり、其威力を増す引立役になり、さしみなればつまか、わさびの格になる。  
兎に角、人の弱點なるものは、其人に取つて最大の致命傷になる。其致命傷が、偶々文字になつて現れて、他人の手に依て暴かれるとなつた時の、弱點所有者の驚きと、困惑は如何なる程度のものだらう即ちよい事にせよ、わるい事にせよ、之を見て顔色を變へない者は恐

感動に耐へざる昏睡

怖るべき一句の威力

筆力催眠術の秘傳

らくないと思ふ。其結果が舉措を失して、態度の一變から、其感動に堪へずして、緊張氣分が失はれ、さうして起立する力がなくなつて、遂に絶倒し、さうして昏睡状態に入るのである。若し其れ、此力を、もつと推擴して考へれば、一句の力は更に擴大して、國際關係に威を示し、宣傳力に於て威を示し、訓示命令文に於て威を示し、其局國家をも、對手をも、被治者をも悉く、催眠状態に入らす程、有効能率を示す事になる。

唯其れ一句である、然るに人を動して、未遂に催眠状態に入らしむべく、あらゆる變形状態を以て、多面に多岐に行動するに至ては、又怖る可き威力ではないか、所謂之れ、一句乾坤を定むの實でないか、所謂之れ、十語九中るも、未だ奇と稱せず、一語中らざれば、則ち懲

人を心の奥底から動す

筆力催眠術唯一の秘訣

青年の切實なる慾望

の實でないか。茲に於てか。手紙に挿入する一句を、大に考察して練る必要、大に研究して、其魔力に依て、人を心の奥底から動す事が、緊切無二の條件になる。世に資本家を求めんとする場合、世に戀人を征服せんとするが如き場合、世に有力なる人を我味方にせんとするが如き場合、或は又自己の願望を、容易に容れさせる場合の如き時、殊に此眼目の一句、殊に中心を爲す一句に全力を傾倒する必要がある筆力催眠術上之ぞ唯一の秘訣である。

第八章 青年に對する筆力催眠

青年は妄想——空想が多い。而して希望と野心が多い。而かも其慾望は、多岐多端であつて、功名富貴は勿論彼等の第一慾望であるが、

青年に對する筆力催眠

其最も切實なる慾望は、火の如き情慾の希望である。そして異性に喜ばれるべく、絶えず外貌形式に苦心する。と同時に一切に於て流行を喜び、一切に於て新しき事を喜び、如何に眞理と雖も、如何に實益ありと雖も、過去の——事實を喜ばない。そして唯勇往であり、突進であり、邁進であり、恰度かの眼かくしをつけたる馬車馬の驀然たる如く、殆んど右顧左眄しない。さうして其目標を理想に求め、英雄——偉人を崇拜し、又其の如き行動を喜び、又其言行を渴仰し、殆んど直線的に其れを確信し、疑ふ處がない。

其處で、青年の心を釣るには、釣ると云ふ言葉に語弊あれば、青年の心を收攬するに改める。其收攬を先づして青年の喜びさうな事を手紙に書く、其うして其れを偉人傑士の格言や、警句で結んで、彼等の

青年の目標は理想

先づ彼の特長を其手紙に賞揚せよ

受身に釣つて彼等を釣れ

希望に共鳴する事を書いたり、彼等の特長を賞揚したり、兎に角新しい流行語等を用ゐて、其處に幾分の挑發分子を加味すれば、大抵の青年が直に催眠状態に入つてしまふ。即ち是れ青年の心の單純、一直線、願わざる缺陷を利用するのであつて、必要あれば、斯うして、其心を捉へおいてから、斯様にして味方に引つけておく。かくて徐ろに、我必要條件を、隱然其れに含めて、漸々引寄せる。即ち此心を以て手紙を書く。さうして十分云ふべき處を六七分に、六七分云ふべき處を、五六分と云ふ程度に、何となく先方にももの足りなさを感受せしめる。そして先方の踏み來るべき餘地を存しおいて、よい意味の受身になつて、目的の陥穽に入れてしまふ。陥穽と云ふ文字が、若し穩かでないとなれば、目的境に引き入れ、接近を自然に餘儀なくさせてしまふ。

何れにしても、青年の心理は、先輩なり、友人なり、其他の人なりが、自分の心を解して呉れる事が嬉しむのだ。自分の主張や、自分の主義に賛成し、若くは偶然に一致暗合したといはれる事が嬉しいのだ。故に青年に對する手紙には、最大要件として、先づ多少對手に負け、譲つてかゝる事を忘れてはいけない。即ち負ける事は勝つの眞理を體得して、極めて軽く共鳴して見せる。遠隔の地に於ける青年は、之をさまざまに解釋して、其集約的意志に依て、無限の感動を惹起する。同時に聯想觀念が、幾つも結びついて其文字、其文章、其筆蹟に又多大の注意を拂ひ出し、果ては文字外の敬愛、崇拜分子、戀慕分子に迄、驚くべき眞實を披歴して、對手を買ひ被る。即ち一事は萬事なり、萬事は一事なりの筆法、推測論理の下に其人——其手紙に心酔し

さうして其心身が捕虜になる。  
つまり青年其れ自身の心になつて手紙を書く又文字を驅使して彼等の心を攪る。然らざれば、此原則を無視して、多感なる、多情なる青年を筆力催眠術にかける事は出来ない。此原則に會得せば、青年が青年其れ自身をすら魅する事が出来る。

### 第九章 婦人に對する筆力催眠

と云ふ標題已に色魔の常套語のやうだ。しかしながら、著者は其んな劣情挑發の目的から、此標題の事實を説明するのではない。つまり婦人のやうな特性を有つものに對して、如何に手紙を書けば、其婦人を感動せしめうるが、如何なる事實を骨子として書けば、其婦人を感

動の極泣かしめ、催眠状態に入ると同一状態に入らしめるかと云ふに其方法は譯もなく出来るといふのである。

一體婦人と云ふものは、意志の強いと反對に感情に脆い。試みに婦人を理屈で説き立てた處で、容易に其理屈や、議論には服さない。殊に正面からでも論ず時に於ては、此反抗力が一層強くなつて、結果が逆になり、説諭の効果が無い。けれども若し然らずして、情を以て説き涙を以て誘ひかける時は、今迄石の如く突ツ張つて居た、その強い意志が、春風氷を解くが如くに融解し、釋然として婦人の特性たる同情の實現になる。さうして他の爲に水火尙辭せざる底の決心を示し生命もものは、一切の虚榮も、一切の慾望も、此爲に犠牲にする事を厭はなむ。さうしては其相手に全力を擧げて迫つて来る。かくて主

説情を以て

男子に愛  
が理想

客位置を顛倒する迄になる。其極端なるものは盲目的に衝動して、前後の分別すら忘れるものがある。

又婦人は、其希望として、男子に愛せられる事、男子の愛を獨占する事を理想とする。即ち俗諺に於ける『女の願ひは唯一つ、可愛がられて友白髪』は、慥に此間の消息を道破したものである。通常女は己れを喜ぶもの、爲に容ちつくるのが生命で、初めから男子に頼る生活が理想である。故に可憐なる彼女等は、其毛髪美を嘆賞されては喜び、其容貌美を嘆賞されては喜び、其衣服美を嘆賞されては喜び、其技藝を嘆賞されては喜び、其良人、其子供、其兄弟、親族、其住宅、其富、其性格を嘆賞せられては喜びつゝ、一年々々に老いてゆくのである。其處に婦人の、いちらしい、愛すべき婦人美があるのである。

愛すべき  
婦人美

婦人に對する筆力催眠

婦人への  
手紙書き  
かた

筆力催眠術の秘傳

四〇

故に若し、男子にして婦人の特質を理解體得して、先づ彼女が、一番何を欲するかを考へて、屹度満足するやうな事實を以て仕向ける時に於て、彼女等は忽ちにして、其男子の意の如くなる、筆力催眠術者の如きも、此亦呼吸を會得する事が必要である。つまり彼女の意を迎へて、先づ吸引し、然る後徐ろに、牽引して同化する。故に婦人に對する手紙は、主として惚れッぱく出て、彼等の同情を惹くやう、力めてごつ／＼する文字及理屈をヌキにする。故に其手紙文字の如きも、情を動かすに足るべき字句——形容詞、或は又卑近なる歌謠の類をさし加へ、親切に、叮嚀に、恰も勗るが如く、恰も惚るが如く手紙を書く、即ち其處に彼女等をして泣かしむる、若くは同情を捧げしむる要素がある。

女子は男  
子の強み  
を喜ぶ

婦人の自  
尊心を毀  
けるな

しかしながら、只管婦人の機嫌を取るべく、悉くの自我を没して迄の、媚び佞りに近き文字と、輕浮極まる辭句とは、切に避けなくてはならない。何となれば、一切の婦人は、男が自己に忠實であり、懇切であり、正直である事を喜ぶけれど、又半面に其嚴しい處、凜々しい處、頼つて以て托するに足る如き強味を喜ぶから、婦人に與ふる手紙には、此要素も必要である。つまり頼母しいと思はせる事實が、その懇切なる文字中になければ、多くの場合、婦人は容易に、男子を信用しないものである。

其れから婦人に送る手紙中に注意すべき事は、婦人の自尊心を毀けない事である。此意味に於て對手の知らざる文字、又は格言、又對手に解しえざるやうな警句、比喻、歌謠の類、時事問題等を切に避ける

婦人に對する筆力催眠

事が必要だ。さうして其婦人の身邊に起りし過去現在の事、又は其婦人の親族間にありし他聞を憚るやうな事實を、其手紙から避ける事が賢明なる作文術であると思ふ。若し之を忘れて、以上の事實を強行する時は、彼女をして、古疵に手を觸れしめた時の如き、不快なる感じを覚えしめて、催眠能率を欲する其筆力に、大なる能率減退が來るだらう。

### 第十章 暗示と心理的影響

人は模倣性に活きる

人間は何人と雖も、大なり、小なり、分量は異なるけれど、必ず模倣性がある。却ち人真似をして喜ぶ特性がある。茲に於てか、世に流行と云ふものがあつて、此に流行に依て衣食し、此共通の弱點を利用す

出歯龜

る者の多い程、如何なる時代でも、流行を趁う者が絶えない。尊王攘夷論が、水戸を中心とし勃發したといへば、天下の浪人にして、之を唱へ、此合言葉看板にして、慷慨悲憤せねば巾の利かない時代があつた。民権自由論が土佐の立志社から起つて、板垣伯等に依て、プロパガンダされた時は、此民権自由を天下に呼號せぬ者は、天下の志士でなかつた。喇叭節の俗謡が、日本全國中の津々浦々を風靡したる時カチューシャの唄が、松井須磨子の嬌名と共に世に喧しい頃、之を歌はぬものは愚な人間扱ひをうけ兼ねなかつた。明治の世に、池田龜次郎なるものがあつて。此醜行汚行に依り、其名が『出歯龜』なる綽名になつて、喧傳せらるゝや、出歯り、出齒る、出齒らる、出齒れと、之を動詞化して、世話に混じないものは、時代後れ人の如く解されし



観念運動  
作用

時があつた。と云ふ如く、時代の流行、時代の流行力なるものの威力は、あらゆる人間の模倣性を恣に弄んで、此傳播宣傳に従事させた。此の如きは、則ち観念運動作用の結果であつて、要は一種の暗示に依て、知らずくの間（ま）に動いてしまひ、真似をしてまひ雷同してしまつたと云ふ事になる。即ち観念運動なるものは、意志の決定なくして、單なる刺戟又は、印象そのものの起したる運動であつて、我々に此の如き事を、毎日々々一生涯中、而かも無意識に行つて居る。例へば、飯上に蠅（は）が來てとまる、其蠅（は）が更に飛躍して頭上へとまらんとする時、意志は未だ決定を與へない、其蠅（は）を追ひ拂ふか、どうかと云ふ事に突急に決定を與へないで居ると、逸早くも先づその手が頭の邊へ行き、そして其蠅（は）を追ひ拂ふ。又衣類に何か汚物のついて居る事に氣

腦で考へ  
てゐる事

がつくと、それをとれ、其れを除けと云ふ、意志の命令が未だないのに、手が先づ、逸早く其衣類に觸れて、自由運動を開始する。つまり腦で考へて居る事が、突如として此観念運動になる。而してかのブラスセットの不思議、群衆心理、流行心などは、何れも皆、此観念運動の結果である。

即ち催眠術では、此観念運動の先天性を、更により助長せしむべく、それに油を注ぎかけるものだ。人工手段を加へて、其能率——効果を高める。暗示は其れである。爲に、さらですら無意識に運動し易き腦力は、此暗示に依て、尙の事大飛躍をして、さうして術者の期待したる陥穽に落ち込んでしまふのだ。

演説會、興業物などを観るに、辯士なり、技藝家なりの論旨なり、

暗示的喝采

魅されたか如き放  
心状態

動作なりが、佳境に入るや、多くの人は感極まつて、唯黙沈のまゝ、恍惚となる。しかし此時は未だ、拍手喝采と云ふ事を誰れもしない。然るに場の一角から、其機を逸せず、唯一人の暗示的喝采の起るや、満場の喝采拍手が、續いて之に和して起る。其ありさまが恰度、響のものに應ずるが如き現象を示して來る。故に手紙なら、手紙の冒頭なり、中頃なり、終りなりに於て、最も心を動し易き、深い印象を與へるやうな、暗示的の文字のある時は、對手が先づ其暗示に於て囚れる、暗示に其心を囚れて、其先入主が、其他の文字、その他の辭句を其囚れたる暗示——聯念——觀念に結びつけて考へる。さうして判断を與へ、其集約的力強き感動をうけて、遂に魅されたか如き放心状態になり、手紙を其手から取り落す事すらある。此の如きは、無論一種の

心理作用ではあるが、又何で暗示の效果に依らざるものと云ふ事が出來えやう。即ち筆力催眠術は、實に此暗示力の——心理的影響に負う處が少くない。

### 第十一章 文字暗示の方法

筆力催眠術に在ては、文字的暗示の效果か、非常なる能率を示す事になる。即ち其文字暗示の方法は、對手が既知の事實にして、とり分け心を動し易き事實か、又それに近いものを選択する事が一つ、若くは對手の近き將來に起るべき事實——問題を擇ぶ事が二つ、又は現に起りつゝある事實——懸案になりつゝある事實を擇ぶ事が三つ、或は又對手が特に好愛嗜む處のものを擇ぶ事が四つ、若くは對手が殊に好

文字暗示の方法

五つの方

まざるもの、厭ふ處のものを擇ぶ事が五つ、即ち五つの方法から暗示的の文字を考へて、其れを手紙の程よい處へ配合する。例へば其人が、近く妻を迎ふるべく、其候補者を頻りに物色せる時、其人を筆力催眠にかけるには、よい候補者があるとか、妻帯するとかいふ事を知らざる體にして、

足下も最早一家をなす年齢に達し候、現在の収入、生活からいふも十分の資格之有と存候。

と云ふ、暗示的の文字を、先づ冒頭に書くとするれば、事實迎妻を欲して居る人なれば、此暗示的の文字に、先づ多大に心が動かされる。其處で其處を期待して、次のやうな普通の手紙文を書き續ける。

依て甚だ差出でがましく存候へ共、此儀に付近日參上親しく拜面

手紙一本  
で催眠  
状態

致し、已に小生物色いたし候一二の候補者に對し、腹藏なき御考へも承り度候間、其節尙委曲申上候も取りあえず得貴意候也。此くの如く一身上の大問題であり、又生活上新紀元を開く第一歩であるから、此手紙を受取る處の本人は、先づ冒頭の暗示に依て、注意力を喚起せられ、さうして非常な熱心を以て、息もつきあえずに、終り迄此手紙を読み終つて感激する。さうしては感に堪へたる餘りに一度も、二度も尙繰返して見るものである。どうかすると、更に一二日を過ぎてから迄、此手紙を出しては、北史笑みをする程、其筆力に心が囚れて被催眠状態になる。

又ある事業家があつて、一大水力電気事業を起すべく、人知れず目論んで居た。すると此事實を知つてか、知らんてか、平生財力に於て

黨派別に依て、暗に相反目する處の知人から、次の如き手紙を受取つたとする。

前略承り候へば益々御發展御隆盛の由大賀至極に存候

さて突然に候へ共小生頃日群馬縣下に旅行し、利根川水源地の現狀を視察し歸京するや急に水力電氣起業の必要を痛切に相感じ候。貴下とは平生政黨關係に於て一般人も認むる如く反對の位置に立ち候も事業經營に吳越なく親疎なく候。間此問題に付一度御會見仕度候。條御都合拜承仕度。此段及御照會候也。

即ち此場合に於ける暗示の文字は「水力電氣起業」と云ふ六文字である。其處で第一計劃者は、此六文字の直ぐ眼に入るや、否や、其刹那棒を呑んだ人の如くなる。茫然として、期待を裏ざられたやう

然知ん態  
くだ棒  
茫人々  
々々の吞

な感<sup>かん</sup>を起<sup>おこ</sup>し、必<sup>かなら</sup>ずや動<sup>どう</sup>的心理作用<sup>しんりさよう</sup>より、忽<sup>たちま</sup>ちにして靜<sup>せい</sup>的心理作用<sup>しんりさよう</sup>に移<sup>うつ</sup>り、さうして一寸の間催眠状態<sup>ちゆうとんまひめいじたい</sup>に近<sup>ちか</sup>き、錯愕<sup>さくおつ</sup>の沈靜<sup>ちんじやう</sup>が持續<sup>ちきよく</sup>する。ついでながら斷<sup>こと</sup>つておき度<sup>た</sup>い事は、人は喜<sup>よろこ</sup>びにつけ、悲<sup>かな</sup>しみにつけ、驚<sup>おどろ</sup>いた時は、動<sup>どう</sup>から靜<sup>せい</sup>に入り、棒<sup>ぼう</sup>を呑<sup>の</sup>んだやうに、其心身<sup>そのしんみ</sup>に一時硬直状態<sup>じつが、ちよ、じやう、たい</sup>が生<sup>しやう</sup>ずる。著者<sup>ちやくしや</sup>の云<sup>い</sup>ふ催眠状態<sup>さいめいじたい</sup>——感動<sup>かんと</sup>の極致<sup>きよくち</sup>とは、則<sup>すなは</sup>ち之<sup>これ</sup>を云<sup>い</sup>ふのであつて、女性<sup>にょせい</sup>の如<sup>ごと</sup>き男性<sup>だんせい</sup>と雖<sup>いへど</sup>も、情<sup>じやう</sup>に脆<sup>もろ</sup>いものは、此場合<sup>このばいひ</sup>に多<sup>おほ</sup>く涙<sup>なみだ</sup>を流<sup>なが</sup>して「催眠<sup>さいめい</sup>にかゝつた」事<sup>こと</sup>の意志表示<sup>いしへうし</sup>をするのである。即ち此媒<sup>すなは</sup>介<sup>ち</sup>を、多<sup>おほ</sup>くなすのが暗示<sup>あんじ</sup>である。暗示<sup>あんじ</sup>的<sup>てき</sup>文字<sup>もんじ</sup>である、暗示<sup>あんじ</sup>に就<sup>つ</sup>いて、又<sup>また</sup>恚<sup>いか</sup>う云<sup>い</sup>ふ例<sup>れい</sup>がある。賣<sup>う</sup>り方<sup>かた</sup>に廻<sup>ま</sup>つて、盛<sup>さか</sup>んに賣<sup>う</sup>つて、賣<sup>う</sup>つて、賣<sup>う</sup>りまくる相場師<sup>さうばし</sup>があつた。其相場師<sup>そのさうばし</sup>の處<sup>ところ</sup>へ、ある日政府<sup>ひせいふ</sup>の要路<sup>えうろ</sup>に居<sup>を</sup>る親友<sup>しんゆう</sup>から、匿名<sup>とくめい</sup>の手紙<sup>てがみ</sup>が舞<sup>ま</sup>ひ込<sup>こ</sup>んだ。曰<sup>い</sup>く

特約した外米數最が、半減される事になつた。随つて此輸入量が、曾て世間へ公表したよりも大に少くなる。策戦上種々都合あらんと存じ、密に此丈内報する。

此場合に於ける暗示的文字は、無論外米であるが、其れよりも、之に伴へる數最半減が暗示である、相場師に取つては、此半減が生命である。随つて、彼は此手紙を手にして、稍久しい間、大なる感動に浸つたに相違ない。さうして往來を通る豆腐屋の聲も、犬の吠ゆる聲も俥の軋る音も、電車の疾走する響きも、若くは階下室で、子供等が遊戯に耽つて、喧騒を極める聲も、耳に入らぬ迄忘我の境に入つたに相違ない。暗示の力も、亦大なるものではないか。

しかし、以上の例の如きは、故らに暗示を與へんとして與へたる暗示でなくて、多くは自發的自然の暗示であつて、發信人それ自身は、

何れを暗示とも氣にすら留めずに發信するのであるが、受信者に取つては、明かに暗示の力が認められ。又明かに暗示の文字の何れであるか、分る。故に此意味に於て、少しく暗示的に文字に注意して、此活用を巧妙に行へば、必ずや筆力催眠の効果を擧げる事が、多大に出來えやう。

### 第十二章 遠隔心理及書翰術

千里を隔てても、萬里を隔てても、真情流露の書翰と、巧妙措辭に注意せる書翰とは、人をして故舊と相對し、骨肉親しく語るの感あらしめる。即ち前者は自然の書翰であり、後者は人為——技巧の書翰——

術を應用せる書翰である。

自然の書翰は、則ち其人となりを知り、其特性如何を知る人にして初めて其能率が發揮せらる。つまりあの人のいひさうな事である、あの人のやりさうな事であると云ふ、過去の經驗に依る觀念——心理作用が土臺をなして、其書翰を價值以上、實力以上に買つて呉れるから其能率が生れるけれども、一面識もない、一面識はあれども、あまり深き交際のない人に對して率直なる考へを、何等の修飾も加へずに、書き送ると云ふ事は、實力を損減する處の不利益を隨伴し、其又思想を傳へて、兼ねてその心を動かすと云ふ目的に、大なる支障が生じて來やう。茲に於てか、技巧の必要、よりよい感じを與ふる工夫、力めて露骨を避けて、婉曲に大抵の事を書き、さうして對手をして、考へ

よりよい感じを與ふる工夫

説明不十分の値打手

しむる程度に、考へて思考せしめ、考へて味はしむる程度に、若くは、深い印象を與ふる程度に、辭句も練銑し、形式もより完全にして、實用一點張りの書翰なりと思つても、之に少しく餘事を書く。此餘事中には、風雅道の事もあれば、家庭上の事も含めば、安否——消息を問ねる事等を、人を見て含ませて、五月蠅い感じを與へない程度に書き添へる、概していへば、説明の不十分なる處に、書翰の値打——があらう。さうして其書外に、聯想する事、考へ及ぶ事等を、故らに書かすにおく事が、對手を感動せしむる手段である。つまり説明の不十分は、過ぎて耻辱を後に殘し、若しくは其れを證據にされて、他日不利益を招くが如き原因に注意するからである。……あとに殘るものそれは書いたものである。其れ故含蓄の多い、銑練して一切に共通す

遠隔心理及書翰術

るやうな、印象を深からしめる文字を、なるべく使つて、冗慢——無  
駄を避ける。其等を書翰の技巧と云ふ。

遠隔の地に在る者は、大抵の場合、其書翰のみを以て事實とは見な  
いものだ。其れが又遠隔人心理の原則であらう。殊に自ら技巧の書翰  
を書く人程、書いた人の心理を忖度したかる、其うしては餘りに買ひ  
被れる結果、餘りに非買ひ被れる結果、ものを過大視し、又過小視し  
婉曲に意義を與へて解釋したり、無意味の文字を、有意味に見たりす  
る等、なまじ技巧を知るの弊が、眞正の書翰を讀み誤る事があり、さ  
うして事實感激すべき事實をも、事實嘆賞すべき事柄をも、全く黙殺  
する事がある。其處で技巧をもう一步進めて、先方の心理を推測し、  
其推測に當てはまる如く、書翰をかくのが技巧の上乗なるものである

巧書翰の技

の乗技巧の上なるし

術専門の書翰法

斯様にして、初めて、遠隔心理を、書翰術に應用する事が出来る。  
即ち書翰術の術は、手段を組織的にしたるアートの意味であつて、  
アートの巧拙は、學力の深淺よりも、何よりも、奇智頓才、もツと押  
平めていへば、文を書くのではなくて、文を拵へる事になる。さうし  
ては、用途を見て——人を見て法を説く的に、隨時その使ひ分けをす  
る事の謂ひである。現時の如く、匆忙、飛行機が天空を征服する如き  
時代には、術専門の書翰法があつて差支へがない。つまり書翰に術を  
應用して、自然的なる、素朴なる、實質のみの書翰に潤ひを與へて、  
單に思想——意志を傳へる以上に、それから大感動——大靈化力を生  
せしむる。遠隔者に對する書翰の如きには、殊に此術の必要がある。  
然らざる單純尋の常の書翰力のみにては、到底有效を見る事の出来な

い時が多い。況んや、對手を魅して、其書翰の虜にする事に於てをやである。

手紙催眠術

勿論純然たる催眠術者の間には、別に手紙催眠術と云ふ術があるらしい。其術者の言に據れば、術者は、先づ屢々催眠したる人か、然らざれば、最も受感し易き者を選び、さうして其等の人か、進んで被術を快諾したる時、

君よ、君は數分の後必ず睡りに落ちるべし。君は眼を覺まし居る事出来えず。君の頭部は非常に重くなり、君は之が爲眠りに入るべし」と大書せる手紙を送る。其うして此終りへ術者の姓名を大書して送れば、對手は之を披き見ると共に眠ると稱して居る。此事實が果してあるかどうかは別として、兎に角純然たる催眠術家の手紙催眠に、か

る主張——實驗のある事を附記し、併せて、遠隔心理——書翰術に對する、一參考資料にする。

第十三章 文字催眠の兩極端

文章は華麗なる程、對句があつて、疊語があつて、五七調か、七五調で、雄勁な、簡潔な漢字を用ゐる程、讀んで心身に爽快を覺えしめる。殊に美しい形容詞が、いやみのない程、程よい程度に、句と章の間を綴り、さうして事實を粉飾すればする程文字は五彩の文を爲し、單に讀んで面白く、興に入り恍惚状態に入るばかりではない。唯默讀——見た丈ですら、紀行文なれば其神韻飄渺たる行文、又は天工人力を奪ひたる大自然の光景を眼前に聯想し、又小説文なれば、其境地

文の魔力



の人を活し、その境地の大自然に聲を發せしめ、さうして身自ら其處にあるの快感を催す事があり、又その他の美文としても、其絢爛、其豪宏、其飄逸、其脫俗、其瀟灑たる種々の筆力に依て、其文に同化し其筆者に同化し、其事實に同化して、羽化登仙する底の心地になり、さうして一種の催眠状態を呈して来る。此の如きは、則ち美文の極致であり、人為の文の極端であり、叙事と、叙情とに論なく、人間の意志をある程度迄、左右する事が出来る。

之に反して、世に悪文がある、此書の此文の如き駄文がある、又低劣極まる文がある、而かも其の如き著述、出版もの或は、短篇——短文か、新聞や、雑誌に掲げられてあるが、之れに催眠状態を呈せしむる事に於て美文の極致に一致する。つまり興味がなくて、無味乾燥で

徒に冗漫だから飽きが来る、それをしも力めて讀む時、屹度睡魔が襲つて来る。此の如きは、則ち催眠文學の上乗なるものであつて、とり分け小説に多い。若くは學殖第一義を標榜せる、悪文學者の出版物に多い。之を以て、某老小説家は、先づ其作の脱稿するや、之を雜誌——新聞、單行本として、書肆の手に交附せざるに先だちて、之を其家の下女に讀ましめて、さうして此爲に催眠するか、せざるか試みて後、初めて確信を得て發表し、若くは中止する事があつたさうだ。即ち之れ、一は快感を催すの極眠りに入り、一は不快感の結果、情氣を催して眠りに入る。等しく是れ眠るのである。而かも其出發點を兩極端に發して、互に其内容實質を異にするのだから面白い。

此點に於て、文の中庸なるものは、筆力催眠の資格なしともいへる

莫<sup>ま</sup> 遮<sup>あ</sup> 中庸<sup>ちゆうちゆう</sup>の文<sup>ぶん</sup>を廢<sup>へん</sup>して、名文<sup>めいぶん</sup>に赴<sup>おもむ</sup>き、そして到達<sup>たうたつ</sup>せざる時は、退<sup>しりぞ</sup>いて惡文<sup>あくぶん</sup>の田<sup>た</sup>を耕<sup>たが</sup>さんかといひ度<sup>た</sup>い程<sup>ほど</sup>、惡文催眠<sup>あくぶんさいみん</sup>は不可思議<sup>ふかしみぎ</sup>で、又名<sup>また</sup>文<sup>ぶん</sup>と奇<sup>き</sup>なる對照<sup>たいさう</sup>を示<sup>しめ</sup>してゐる。

### 第十四章 宣傳催眠術

プロバガンダは、歐洲<sup>おうしゆう</sup>戰<sup>せん</sup>後<sup>ご</sup>の、人類<sup>じんるい</sup>生活<sup>せいかつ</sup>の舞臺<sup>ぶたい</sup>を風靡<sup>ふうび</sup>したる標語<sup>へうご</sup>である。即<sup>すなは</sup>ち時代<sup>じだい</sup>の要求<sup>ようきゆう</sup>から生<sup>う</sup>れたる、新時代<sup>しんじだい</sup>語<sup>ご</sup>であつて、之<sup>これ</sup>を漢字<sup>かんじ</sup>にあてはめれば「宣傳<sup>せんてん</sup>」又は「公<sup>こう</sup>の廣告<sup>かうこく</sup>」になる。廣告<sup>かうこく</sup>なれば、東洋<sup>とうやう</sup>に我<sup>われ</sup>日本<sup>にほん</sup>にも昔<sup>むかし</sup>からあつた。しかし新語<sup>しんご</sup>としてのプロバガンダは、從來<sup>じゆうらい</sup>の廣告<sup>かうこく</sup>か、單<sup>たん</sup>に營利<sup>えいり</sup>を意味<sup>いみ</sup>し、廣<sup>ひろ</sup>く買<sup>か</sup>るべく示<sup>しめ</sup>し、廣<sup>ひろ</sup>く見<sup>み</sup>すべく示<sup>しめ</sup>し、廣<sup>ひろ</sup>く領城<sup>りやうじやう</sup>を擴張<sup>くわくちやう</sup>すべく示<sup>しめ</sup>し、或<sup>あるひ</sup>は唯<sup>ただ</sup>公<sup>こう</sup>に示<sup>しめ</sup>す意味<sup>いみ</sup>を以<sup>もつ</sup>て、新聞<sup>しんぶん</sup>に

プロバ  
ンダ

雜誌<sup>ざっし</sup>に、電車<sup>でんしゃ</sup>に、電柱<sup>でんちゆう</sup>に、四辻<sup>しつじ</sup>に、棟頭<sup>とうとう</sup>に、屋根看板<sup>やねかんばん</sup>に、蒔<sup>ま</sup>き札<sup>しやく</sup>に、樂隊<sup>がくたい</sup>に、オルミネト<sup>おるみねと</sup>ンヨンに、若<sup>もし</sup>くは其他<sup>そなた</sup>の手段<sup>しゆだん</sup>を以<sup>もつ</sup>て行<sup>おこな</sup>はるるに對<sup>たい</sup>し、プロバガンダは、大半<sup>たいはん</sup>主義<sup>しゆぎ</sup>を宣傳<sup>せんてん</sup>し、主張<sup>しゆちやう</sup>を宣傳<sup>せんてん</sup>し、政策<sup>せいさく</sup>を宣傳<sup>せんてん</sup>し、營利<sup>えいり</sup>——商業<sup>しょうぎや</sup>——産業<sup>さんぎん</sup>——等<sup>とう</sup>と、さまで直接<sup>ちやくせつ</sup>の交渉<sup>かうしやう</sup>がないらしいが、若<sup>もし</sup>し露骨<sup>ろこつ</sup>に此區別<sup>このくわくべつ</sup>をいはせるなれば、今日<sup>こんにち</sup>はもう此區別<sup>このくわくべつ</sup>が大分<sup>だいぶ</sup>に混合<sup>こがま</sup>して、從來<sup>じゆうらい</sup>いつたやうな廣告<sup>かうこく</sup>の意味<sup>いみ</sup>に迄<sup>まで</sup>考<sup>かんが</sup>へ出して來<sup>き</sup>たらしい。其處<sup>そこ</sup>で廣告<sup>かうこく</sup>といふべき處<sup>ところ</sup>に迄<sup>まで</sup>「宣傳<sup>せんてん</sup>」と云<sup>い</sup>ふ、新<sup>あたら</sup>しい標語<sup>へうご</sup>を持<sup>もち</sup>出して人<sup>ひと</sup>が得意<sup>とくい</sup>がる。よしさうなれば、其れでもよいとして、宣傳<sup>せんてん</sup>の文字<sup>もんじ</sup>——文<sup>ぶん</sup>章<sup>しやう</sup>は、どう書<sup>か</sup>いたのがよいか、どう書<sup>か</sup>いたのか、筆力催眠<sup>ひつりきさいみん</sup>に近いかと云<sup>い</sup>ふ事<sup>こと</sup>が問題<sup>もんだい</sup>だ。

有効<sup>ゆうこう</sup>なる  
宣傳<sup>せんてん</sup>文<sup>ぶん</sup>

著者<sup>ちやくしや</sup>は之<sup>これ</sup>に對<sup>たい</sup>して、恚<sup>いか</sup>う云<sup>い</sup>ふ意見<sup>いけん</sup>を有<sup>あ</sup>してゐる。宣傳<sup>せんてん</sup>を有効<sup>ゆうこう</sup>ならし

○文章は、大約次の如くなる事を條件とする。

- 一、文字数の少い事
- 二、簡潔な文章で平易である事
- 三、含蓄に富んで印象を深からしめる事
- 四、記憶に便にして、通俗である事
- 五、其文を見て人が心を動して、宣傳者の希望する圈内に續々進んで行く事
- 六、力めて模倣を避けて、俗悪を避けて、文章(意匠圖案)の奇抜

清新なる事。

さうして、其れに繪畫等を加へるなれば、文字に於て缺けた意味を繪畫で補ひ、繪畫に於て缺けた意味を文字を以て填充し、兩々相對し

て、其れから有效——集約的結果を生ましめる事が出来る。勿論その文字は、暗示的でなくてはいけない、挑發的では殊にいけない。つまり其暗示的の文字を見ると共に、所謂以心傳心の作用か、唯譯もなく、ふらくと其宣傳能率を可能ならしめ、増進すべく、其主義を奉じ度なり、其商品が買ひ度なり、其物品が見度なると云ふ事實が生じて、初めて筆力催眠状態に入つたと云ふ事が出来る。

其れには宣傳術として、先づ群衆心理を研究し、其群衆心理に、絶えず應じてゆく處の、新しき工夫——用意が要る。即ち以上を約言すれば、人の記憶し易い文字を、少量に使つて、そして印象を深めて、其心を動して、遂に其れを行動に示さす迄にならしめる。

其處で、此無限の威力を有つ、無限の權威を有つ、文字をどうして

宣傳文の生命

宣傳文に用ゐるやうか、頗る至難の問題になるが、此の如きは、各々其人、其局に當る者の、考へ如何に、多くは存してゐやうと思ふ。例へば、土地を見て其手段を考へる、職業を見て、成るべく共通の文字を用ゐる、季節を見て季節の動植物——自然現象を利用する。又はあり來りの格言、警句、比喻、俚諺等を利用する、然らざれば時局問題を利用し、年中行事を利用し、勃發せる事件を應用して、人の注意力をより多く、より深く其れへ集中せしめて、一つ考へさす迄に至らしむれば、宣傳文の生命が、十倍にも、二十倍にも、五十倍にも活きる。さうして徒に量を多くする事を、切に慎まねばなるまいと思ふ。

### 第十五章 繪畫催眠術

繪畫を見て善惡より選

等しく是れ筆力である、文字——文章に一種の靈ありて、人を魅する如く、繪畫にも、亦人を同化し、人心を動亂せしめて、根本から其人格をかへしめる底の不可思議なる事實もあれば、其れを見て、絶えず美妙なる感じを受けつゝ、惡より遷善した處の傳説すら今日ある。等しく是れ筆力であるが、繪畫は文字よりも、もつと通俗で、もつと卑近で、其感化力が直接で、其普及の結果も廣大である。

けれども、繪畫に神品があり、妙品があり、絶品があり、秀品があり、此等の特殊非凡のものにして、人を高雅に誘導し、人を聖化し、人を美化し、人を淨化し、さうして其情操を高めて、殆んど第二人格を興へたかの如き事實もあり、其を絶えず坐上に懸けて、生活訓となす底のものもあり、さうして又此厭ふべき俗生活の煩悶を、一時なり

とも忘れ去る人もあるが、之を別にして世には、活動寫眞常設館の表看板の如く又は劇場の鳥居流の繪看板の如く、乃至は商品廣告のカレンダ一の挿畫、又は新聞、雜誌廣告の、圖案——繪畫の如く、美感第一主義でない、通俗普及第一主義なる、卑俗極まる繪畫もあり、更に甚しきは、平裸體なる新聞紙上の藥品販賣の廣告繪畫、又は同一目的の醜美對照繪畫の如き、易風革俗に寸效なき繪畫は、如何に讓歩して見ても、恍然として美感を催して、唯何となく、一種のインスピレーションに打たるゝ等の事が毫もない。

つまり繪畫の美醜觀念は、繪畫を利用するものの、利用法如何に依て定ると共に、又社會——俗流に媚ぶべく、確信なき繪畫を、唯糊口の爲に描く、精神なき其手段に依て決定される。

美感第一主義でない廣告

天真動人動かす

文字通信

拙なれば、寧ろ拙でもよい、自然なり、人事なりを、僞らずに、有りのままに書けば、素人には素人の特長があり、拙ない者には拙ない者の特長があり無邪氣があつて、其真か人心を動すに足りる。殊に少しく繪才のある人か、その手紙を補ふべく、咄嗟の間に、挿畫を以て文字能率を進めるが如きは、書文一致の集約力か生れて、其處に迄無限の感興をその人に與へ、さうして其人の印象を、極めて深める結果になる。

此意味に於て、畫家のみとは限らない。素人の繪畫も、今後の文字通信に於て、人心を左右すべく、文字と併合集約し、そして能率を發揮する場台か澤山であらう。かくて對手を放心状態に入らしめてしまふ事が出来やう。況んや讀む文字が、次第に面倒かられて來て、繪畫

を見て、事實を知る程、新聞が發展した時代ではないか。

### 第十六章 韻文催眠術

韻文と云ふのは、支那人の發明した漢詩のやうな、我々日本人の發明した和歌、俳句、新體詩のやうな、乃至は川柳、今様、唱歌、俗謡のやうな、若くは歐米文學で謂ふ、所謂詩のやうな、即ち人の感情に訴へて、美しい觀念になる、一定の字數、曲譜、調節を整へた、藝術的の文字のいひである。無論實用の文字とも異り、直接生活に交渉のない文字ではあるが、一切の社會生活は、此韻文なしでは進んでゆけないものだ。殊に文化の度が進めば進む程、人間生活の要求は美を慾求し、享樂を慾求し、さうして次第に其高まれるものへくと進んで

ゆく。花柳界から、若し、其の三絃と、歌曲とを永久に取り去つたならばどうである。小供の口からあの唱歌や、鞠歌を奪ひ去つたならばどうである、紳士の手からあの謠曲の本をもぎ取つたならばどうだらう、文學の趣味の人の手から、彼等の詩集を取り上げて、其作詩を封じたならばどうだらう、恚ういふやうにして、尙歌人の歌や、俳人の俳句や、新體詩人の新體詩を、悉く嚴禁して、此世の中から葬つたならばどうである。さうして尙琵琶歌を失ひ、音樂に對する歌曲を失ひ去つたならばどうである。恐らく人は、單に焦燥せる、乾燥無味なる乃至は單調極まる、潤ひのない、美の享樂のない社會生活——人生に疲れてしまふ事だらう、若くは其局死んでしまふ者が出来る事だらう。

人生不可  
手段の生活

筆力催眠術の秘傳

七二

要するに、美を享受して、其美に生きて、現實生活の痛手——創痕を癒すと云ふ事、さうして元氣を回復して、更に／＼人生戦に参加する事を得ると云ふ事は、人生に缺く可らざる生活手段であつて、演劇も、寄席も、活動寫真も、天の與へたる自然界の奇工も、四季折々の眺めも、つまりは人間美育の爲であり、生活の正面を、此裏面生活で緩和する爲である。随つて人は、單に松吹く風を聴いてすら、これを一種の音楽化し、乃至は海邊に濤聲を聞いても、其れを天然の樂音に解釋し、虫韻も、雨聲も、萩の葉の友すれも、落葉颯々の聲をも悉く詩と觀し、悉く畫と觀じ、文字なき、趣味なき山家の一枚童と雖も、此大自然の音樂、此大自然の傑れたる詩の前には、自づと哀感湧き、自づと心の琴線をかき亂されて泣く事がある。此意味に於て、自然の

美妙、玄妙、絶妙

正氣の歌

濤音松籟に、人工を加へたるが如き音樂——其歌曲、及詩歌、俗謡の如き韻文は、其れを歌つて、其れを聴いて、歌ふものをも、聴くものをもほろりとさせる。何故ほろりとさせるか、其譯はわからない。即ち其處に超科學があり、即ち其處に言云ふ可らず、筆盡す事の出來ぬ、美妙、玄妙、絶妙がある。

人は此美妙、玄妙、絶妙の域に至つて、初めて其美妙、其玄妙、絶妙に融合同化して泣かされ、若くは笑はされ、若くは慰安を與へられ若くは昂奮状態に入らしめられる事になる。藤田東湖の『正氣ノ歌』文天祥の『正氣歌』何れも、其極致に達したもので、之を讀んで泣かぬものはない。さうして昂奮状態に入らぬものはない。

風吹けば沖津白浪たつた山夜半にや獨り君が越ゆらん

韻文催眠術

七三

本妻第一

と云ふ一首の和歌には、妻の貞操を知る事が出来ると共に、あたし女の許へ、夜良人を、立田山を越えて打通ふ些も怨する氣色なく、却てその身の上を思ひやる、優しき女性の特性が見えて居る。故に此歌一首の爲に、男の女通ひが、はたと止んで、本妻第一義の、家庭圓滿生活が出来たと云ふ處に、韻文の催眠的神通力が潜んでゐる。

王維は唐代有数の詩人であつた、ある時安祿山が凝碧池に催せる宴に臨んで

萬戸傷心生野烟 千官何日再朝天

秋槐葉落空宮裏 凝碧池邊奏管絃

の詩を作つた。其後唐の天下が恢復されて、祿山一味のものが、續々誅戮される時に於て、彼れは不思議にも其生命を救れた。と云ふのは

筆力に伴ふ詩才

吉田惟足の歌

此詩の心が、よく後の勤王黨に理解されたからである。少くとも彼れに對する悪感を、詩力を以て除いてしまつたものと見て差支へがない即ち筆力に伴ふ力、筆力に伴ふ彼の詩才が、反對者を催眠状態に入らしめた事が分る。

思へ人使ふも人の思ひ子を我思ひ子に思ひくらべて

之は神道の大家吉田惟足の歌である。惟足が主人に打擲される召仕を、此歌一首で宥させたと云ふ歌である。此場合<sup>この場合</sup>に於ける此歌が、召仕の主人なるものを感奮せしめて、催眠状態に入らしめた事は無論である。

斯様に韻文は文字外に意あり、又深長の意味ありて、惻々として人心を、根底から動かす力あると共に、其修飾し、鍛へられたる一句、一章



が之を朗誦して、直に人を其美に酔はしむる事、催眠術にかゝれる如くする事が出来る。若し志ある人にして、韻文を學んで、其美妙を活用せんとすれば、古今の文學書、詩集、歌集、俳句集等を繕きて、之を大に玩味咀嚼する必要がある。

### 第十七章 讀書催眠術

俗に書に讀まれると云ふ事がある。又讀書に囚れると云ふ事がある。しかし讀書の趣味は、此境域に入る程深く進まなければ、催眠状態の持續はむづかしい。つまり、先づ其者に傾倒し、その人の言ふ事、書いたものなれば、悉く是なりと確信して、直線にその人の學說、主義を其書に就いて讀み耽つて居ると、いよく益々其主義、其學說が難

有いものになり、さうして文字、文章、それに流れる思想と、自分の心身とか、獨りでに融け合つて一つになり、殆んど忘我の境に入る。此くの如くして、初めて讀書催眠術の效果の、ありえたと云ふ事が出来る。

元來讀書なるものは、一度讀みて分らず、二度よみて分らず、三度、四度讀むと云ふ如く、其れに専心し、さうして其趣味が出て来る。即ち錫を噛み、鯉節を噛みしめるが如きものである。さうしてだんだん引つけられて、其讀書に没入するのであるが、大抵の人は、かやうに催眠状態に入らぬ前に、其讀書を止めてしまふ、面白くないと云ふ理由、分らないと云ふ理由の下に止めて、又顧みないものが多いから、人を催眠さすべく拵へた、著者の期待が全然外れてしまふ。

其處で、世の中には、直に催眠状態に入るやうな、速成の著書、通俗なる著書、興味中心の著書があつて、絶えず讀者の心を捉へるべく、文を作り、想を構へるにも、唯々それのみに苦心して書いたものがあつて、現代の文學書類、輕快なる雜著は、皆大半これである。さうして其開卷第一章から、人を引つけるやうな、挑發的なる文字、耳に傳へて、快い感じを與ふる文字が、羅列してあつて、遂にしらすく終り迄、其書を読んでしまふ。其うして書中の人物を思ひ、其男女の關係事件の文を考へ聯想し、唯譯もなく恍然として、尙その先——此と同一種類の讀物もかなと探し出す。此の如きは、則ち立派な讀書催眠にかゝつたものであつて、日常生活の中に在つても、絶えず其書中の人物——境遇——言動を思ひ出す程、深い印象を與へられる。筆力催眠

讀書催眠にかゝつたもの

所謂「山」

希望の者は、宜しく此呼吸を會得すべしである。即ち此呼吸中には、所謂「山」なるものがある。つまり場當りとも云ふべき處、俗耳俗眼に入り易い劇的の處、波瀾萬重、覺えず手に汗せしむる底の處を拵へて、其れを極力修飾的の文字で、巧みにこねあげらる。さうして其う云ふ處を、一箇の中に、幾つもの拵へては、讀む者をして、息をつく隙すら與へぬやうさする處に、其人の手腕が現れる。さうして、其讀者の心を、全然我ものに奪つてしまふ處に、催眠術が含まれる。

第十八章 書道催眠術

書は一種の美術である。殊に學校教育に於て、次第に習字の時間を

漢字の強  
執着心

滅滅しつゝある現代の如きにあつては、悪筆家が社會に益々殖るる。學問を手習ひと稱し、習字本位で、讀書はつけたりでありし、かの寺小屋教育時代を去る、僅々五十年経つか、たたぬかに、もう一人前に文字を書く人が居なくなつた。居なくなつたと云ふよりも、通常の文字を書く人文字らしい、文字を書く人が居なくなり、其れを又毫も怪まない時代とは愕き入る。其處で、よし其文字をペンで書だにもせよ、萬年筆で書いたにもせよ、又鉛筆、毛筆で書いたにもせよ、其文字——日本固有の文字——漢字と假名文字の混成した文字が、何となく古い時代のもの、先人の遺物——記念物、その記念物を、尙今も使用しつゝ用便して居る處に、一種の親しみ、一種のなつかしさを感せずには居られない。しかしあり體にいへば、現代人は、此漢字を、假名文

理外の理

字を時代後れなりとして表面に排斥しつゝ、裏面に於ては、此強い執着心、此先入主的因襲に囚れて居て、漢字や、假名文字に對して、隠れたる保存慾がある。随つて其中の文字に對しても、超科學的なる、理外の理とも云ふべき靈感を有して居る。さうして書道の大家、書を以て鳴る有名な人が凋落する度に、文字の生命の滅びる位に感じる人々は、此等の文字に對して、學者、非學者を問はず、一つの信念があるらしい。

故に如何に歐米の翻譯文化が、現代日本、現代東洋を侵略したやうとしたとて、未だく我々日本人の文字は、百年や、二百年ではなくならない。果して然らば、我々に親しみの多い文字存慾黨は、いよいよ益々書道を發展せしめて、其藝術である處の使命を、十分果したい

と思ふ。

而かも今日は、用が便りる事を主眼として、眞に物の符合扱ひを文字にする故、到る處惡筆の天地になつた。故に少し書道の心得だになれば、其人は直に文字を以て、群衆間に異彩を放つ事が出来る。加之らず、本統に精力を盡して書いた文字、墨痕淋漓、氣韻躍動と云ふが如き文字に對しては、見れば見る程、その一線、一劃、一點か、微妙なる心理作用になつて、人心を牽引し、さうして額なり、軸なりを掲げし、其坐敷、應接室が、如何にも淨い、神聖なものに見えると共に、其文字の精神に引込まれてしまひさうになる。此の如きは、則ち書道――催眠術の萌芽であつて、その神品、其絶妙品たるに隨つて、眞の催眠状態に入らしむ事が出来る。

一體書は、繪畫を鑑賞する程の人には、餘り喜ばれないで、玄人向きのものとなつて居る。殊にその人の人格を就中躍動せしむる、若くは正史の隠れたる事實を補ふが如き書翰――文字は、玄人中の玄人が喜ぶものになつて居る。が、眞に文字に對して、靈感を禁じえざるものは、此の如き偉人、傑士の墨蹟、よしそれが拙ない文字にもせよ、その人を崇敬し、其一生涯を回顧し、そして其行動を聯想し、その時代の周圍――氣分を聯想する時は、自つと其文字が生動し、多くの崇拜者は大抵、催眠状態に入つてしまふ。

之ばかりではない、入學試験の答案を書く學生、高等文官の試験をうける人物、辯護士判檢事其他の試験答案を書く人々にしても、無論與へられたる問題を、立派に解釋して書く事は第一であれど、其又文

字に依て、謹嚴な人が、無造作な、粗暴な人が、緻密をかく人かといふ事も分れば、其れよりも、之より。文字を奇麗に、正しく書いた答案は、試験員が之を手にして見ても、直ぐ快感を覚える。さうして同じ成績なる、粗暴なる書きかたの其れよりは、多くの場合、必ず採點を多くするらしい。即ち此等の點から見ても、初對面もない人、自己を試験して呉れる人、當方から要求を提出する人に對しては、文章をよく書くと共に、其文字を出来る丈、丁寧に、正しく書くと云ふ事を忘れてはいけない。さうして人をして、其文字より、一種の快感を生ぜしめ、又茫然たらしむる程度の熟達を生ましめたい。此の如き人は、之に依て人知れぬ微妙なる、幸福を永遠に享受する事が出来る。

### 第十九章 作文上文字驅使の秘訣

敢て驅使と云ふ、十二人に文字を胸中に藏せば、思ふ事を書く時、其文字が自由自在に出る。しかし限りある人、限りある生活は、一切の人が此文字のみに、専念し、研究して居られぬから、文字の驅使の巧妙から、大なる利益を得、又目的を達する事を知つてゐても、其れに没頭する事が出来ず、知りつゝ、其幸福を取り逃して居る。此の如き人は、作文書、通俗手紙の文を指南する出版物中に、集めた類語を其れに依て利用するか、又は近頃澤山坊間にある處の、漢語大辭典や、熟語大辭典や、漢和大辭典やらの、語句を専問に集めた本を購ひおき、之を隨時驅使する事が簡便であるが、同じく驅使する中にも、其驅使

文字驅使  
上の手段

作文上文字驅使の秘訣

方法、手段に注意が要る。

人はよくも毛嫌ひをする、人はよく感じのわるい文字を排斥する癖がある、同時に好む文字、自ら進んで濫用する文字がある。姓名判断の如きも、實は文字を毛嫌ふ處から生じて來る程、人は文字に對して神經過敏を免れない。故に人の書いた文章でも、文字にも、此神經過敏を適用し、さうして自分勝手なる心理状態を往々に拵へる。況んや迷信家の人おや、況んや小心翼翼々の人おや。其處で人を見て法を説く調子に、人に依て文字の使ひ分けをする。

例へば、一筆啓上とか、拜啓とか、過去の慣用語を好まない人なれば、冒頭から用件を書いてやるべく、其用件に對し對手が大なる注意を拂ふやうな、力強き、印象に残る、緊縮した文字を用ゐるとか、又

女の金持  
たの褒めか

其人が呑氣な手紙を喜ぶ人なれば、角苦しい熟字を力めて避けて、言文一致が何かで理屈ヌキの手紙を書く事にする。此場合に於て、熟字の選擇程苦心を與へるものはない。即ち進歩と云ふ事を云ふても、單に進歩と書いた丈では、現代人が満足しないに極つて居るから、向上發展と書く、これでも満足のなら兼ねる人には進境著しくとか、意外に長足の御進捗にてとか、若くは無限度無極度の御發展、實に驚き入り候、恐らく他に此の如き類例有之まじく被存候、兎に角小生等の知る限りの範圍にては、全く此の如き新記録を發見するに苦み候とか云つて、種々さまざまの書きかたがある。

若し其れ、女を褒め、金持を褒めんとすれば、もう紋きり型の褒め言葉では、先方が阿諛されたと思つて、眞に心から喜ばない。其處で、

露骨なる美しいと云ふ言葉を省いて、成るべく婉曲に、他に比較して云ふか、他人の言を藉りていふ如く、其公平な批判振りを先づ示す。金持の如きも、貴下は驚くべき金持ですでは、向が喜ぶまいと思ふ。又貴下は如何にして、現在の如き資産を作られたかといへば、之ならば少し、喜ぶに相違ない。其處で此呼吸を外さず、天下に金持は多いが、多くは死金を遺すやうだ。つまり貴いのは克く得て克く散する主義で、有効に使用し、必要を満たす爲に使ふのだから敬意を表すに足るとでも手紙にいへば、大抵の金もちが歎喜する。擡げられ、媚びられたと思つても意が動く。さうして其人を自分の知己が何ぞの如く解し初める處の萌芽が生れ出し、さうして漸々、文字催眠にかゝつてゆ

相變らず、同じやうなる事をして、どうやら其日を暮してゐるが、願れば此數十日は夢の如うだ。夢とても決して悪夢ではない。實に、美しい夢だ。ヤレ倫理の、眞理の教育のと、ヤカマシイ無趣味な世の中も、同じ世界にあるかと疑はれる位なものだ。此文は、故高山樗牛が、友人藤井健次郎に送つた、清見瀉の風光を占めし、駿河の龍華寺に、病を養つて居る時の手紙であるが、樗牛ほどの人が、好んで、此中へ片假名を入れたのが興をひく。同時に手紙を書く事も、懶うい境遇裡に、尙手紙を書いて胸中の感情を友に語り、さうして友の慰安の言葉を欲した事が、歴々全文字に現れて居るが、特に假名の挿入が面白い。つまり之は注意して入れたのでない、自然さう書かねばならぬ、境遇が文字を通して、文章に現れて居るのが悲

しく、又哀れ深い。

一年只三月、三月只清明、清明は纔に數日、能く幾時の晴を得む。

群芳已に争ひ發き、衆鳥亦競ひ鳴く。此の境地にあらずんば、何に

縁つて答へん。此の酒君にあらずして、誰れと共に傾けむ。春光

此の如きも、賞を同うせずは、今日の日我を棄て、行かむ。

右は管茶山が、詞友に寄せた漢詩の國譯である。即ち此人は「黄葉

夕陽村舍集」の著者であるが、之を轉じて、書翰文と見ても面白い。

さうして就中清明……此酒君にあらずしてと云ふ文字が活きて居る。

さうして境地の美感と相兼ねて、一種の酒頰を書いたが如き意味にな

り、此の如き文字——消息に接して、誰れか又蹶起して、清明の天地

に濶歩せぬものがある。遊意勃々たらしむるの魔力か——催眠的

管茶山の  
手紙

書托の文  
字に死活  
あり

効果がある、慥にありと云つて然るべしだ。殊に彼が、書翰文の研究家で  
あつて、其遺著を世に遺してあるのは、とり分けて面白い。その中に、  
書札の文字にも死活あり、例へば一筆啓上 仕 候 より、御無事御  
堅固無恙、時候御自愛、猶期二後音一は、書くも書かざるも、忘れぬ程  
の事なれど、此間に、此間の寒氣は、弊卿は海濱に氷を見る。或は半  
月一月の早りなるによそには夕立すれども、此處には降らずなどあ  
らまほし。同じ寒暄を叙ぶるにも、其地の氣候を思ひやられて、書状  
の文字も活くもの也。月日の末に、此書認めたる時は、雨しきりに降  
り、時鳥二聲三聲音つるなど、書きたらんには、いよいよ其時その人  
の姿おもはるゝやうにて面白し。長き三尋あまりある書札にても死し  
たるあり、三行四行の書札にても、活きたるあり」と、彼れは頻りに、

作文上文字驅使の秘訣



その頃筆力の能率増進を説き、如何にせば人を感動せしめ、如何にせば、用便を十分達するかに苦心した人であつて、見かたに依ては、筆力催震術の大家であつたのだ。

つまりより少い言葉を以て、情意兼ね具はりし文を書き、文字を書き、さうして之に依て生活を緩和する事が、大に必要だ。

### 第二十章 催眠的古今の明文

#### 小松一笑に與へし書翰

松尾芭蕉

然れば御約束の水鶏笛送給。珍重存候。此里の人々聞き慣れず、女どもも集り、我を藝者の様に申す、をかしく候。行脚

さき、國とところによりて、一向音を知らぬ人御座候間、吹きてきかせ、可申と悦び申候。鹿笛も、木曾より貰ひ申候。ほととぎす笛も御座候はゞ、ほしきものに候。水鶏笛つくる人は、つくるべくと存候。乍御面倒之も御き、可被下候。何にても相應望みのもの細工人へ謝禮いたすべく候。はつかりの聲、水鶏たゞくなど歌にも、發句にもつくる人の、さし竿にて、とり網にかけないといたし候は、口と心と相違にて、名句吐き候ても、うそつきと云ふものにて候へば、まことの風流人から見れば、あはれなる事にて、たとひ殺さずとも、雲に飛び、地にはしり候鳥を、ちいさき籠に入れたのしみとなすは、牢番も同じ事にて候を心づかず、籠をならべ、之は二兩の駒鳥なり、之は五兩の鶯なりといひて、摺鉢に、小袖

の肌をしぬき、高祿の人々もさもあさましきさまする人、武林連中には有之ものにて候。此開此籠放白閑の詩意など、教訓可被成候。伊賀の家中の人も御坐候間。土芳にも此事度々申遣り候。即ち此場合に於ける暗示的文字は『水鶏笛』である。其れが次第に鹿笛、ほととぎす笛と云ふ順序に書き來つて、大風雅論を、此短い手紙の中に包み、さうして動物虐待防止會員が聞けば、百萬の味方でも得し如く喜ぶ、所謂俳道——風雅道の神髓を、少き文字を以て、とり分け力強く説いて居る。

蔣繪師に寄せたる書翰

紀伊國屋文左衛門

暗示的文

紙文の手

此程も頼み入候印籠、考見候處朱だめはあしく候。やはりる色にて、波のまさ繪にいたし度候。來月初旬、旅中用ひ度候。早頼み入候。此文とゞき候間、もたせ進じ候。御たのみの事と察し入候。

う月

青梅様

紀文

千山と號し、俳句もやり、花柳事情に通じて、豪遊——通な遊興をした人程に、商人とはいへ條、文に露ほどのいやみがない。すらくと書き流した中に、其人を想見しうる何ものかあるやうだ。

一休の母の訓戒狀

一休の母

我輩娑婆の縁つき、無爲の都に赴き候。御身善き出家に成り玉ひ、佛性の見を磨き、其眼より我輩地獄に落つるか、落ちざるか、不漸添ふか、添はざるかを見玉ふべし。釋迦達磨をも奴とし玉ふ程の人に成り玉ひ候は、俗にても苦しからず候。佛、四十餘年説法し玉ひ、遂に一字不説と宣ひし上は、我と見我と悟るが肝要に候。何事も莫忘想。あなかしこ。

九月上旬

不生不死身

千菊丸殿へ

一休の母の手紙

此文の眼目

流石に一代の悟僧、大智識一休の母だけに、凡僧輩以上の宗教觀を有し、さうして其文字中に、犯す能はざる堅い信念の力が顯れて居る。即ち此文は「釋迦達磨をも奴としなし」と云ふのか、此文の眼目であり、又之を中心とせる難有き母の筆力教訓である。而かも女性の身に、此潤達、洒落の文を行る處、真に嘆服せざるを得ない。

節物に關する書翰

多田親愛

貴書拜見いたし候。此間の御書中には、少し御不快のよし、昨今如何被遊候や。御様子伺上候。さて御高吟とりぐ、一々感服いたし候。愚老も轉居已、以兩三句うめき出し候ま、申上候。

儼眠的古今の名文

九七

轉居

山茶花や昨日は根岸今日小梅

門葉への教授をしばらく

休みて

筆おけば手先つめたし今朝の霜

草菴の井のもとにて

もむほどに此處にもわくや冬の水

述懐

人の身のゆくえのはてや枯野原

愚吟御一笑可被下候。十日頃は庵中少々かたつき可申候。其頃

光來可被下候。書外拜顔可申述候。草々穴賢。

多田親愛  
の手紙

平重盛の  
手紙

多田親愛は、小野鶴堂と同じく、優美なる書體に書を書く人、即ち世尊寺流の書家であるか、別に俳句の趣味もありと見えて、和歌や、漢詩でない、俳句にて手紙を美化したる處に、其人の用意がある。

廷臣に與へたる書翰

平重盛

出仕事きこしめされ候に付て即ち被下仰候條、殊畏入候。まゐり候て申上べく候旨、可有御意候哉。恐々謹言

十二月十四日

短文の中に、威嚴を含み、且つ其上に用事に對しての要領が得て居つて、現代の如き多忙なる生活時代には、一切の人が、此の如き實質

催眠的古今の名文

本位の手紙を書いて、互に浪費の節約をして、互に喜ばねばなるまいと思ふ。

柳原義光に寄せたる書翰

近衛篤磨

拜啓。過日拜借を願候秘藏の珍書早速御送附被下難有奉存候。拜見の上大に参考に相成、喜悅不過之候。乃ちこゝに返上仕候間、慥に御落手被下候様願上候、右御禮申上度。

草々頓首

近衛篤磨の手紙

于二月十七日

近衛公は、近世の公卿華族中、最も器宇の宏偉な、識見の俊邁なる

公の性行の超然

人で、兼ねて新しき政治的手腕と、抱負を有して居て、その當時から西園寺公と相並んで、華胄出身の、新二大人物を以て目された。此手紙は單に普通の手紙文、何の奇も、何の面白味もないものであるが、其處に公の性行の超然が現れ、さうしてとり立て文を飾らざる處に、公の人格がほの見えて、却て貴重敬仰の度が増して来る。

断られたる出資を懇情する書翰

著

者

先日は拜趨、御多用中御邪間恐縮千萬に御座候。

歸來仰せの儀に付、殆んど徹宵して考慮を籌し候も、他に活路を開き、死地に生を得るの道は、全く之れなく、真に絶望至極の御座候。

催眠的古今の名文

出資を懇む懇書

しかし御承知の如く、已に第一回の拂込みを了し、已に線路の起工にも着手仕り、その上政府の補給金も下附され候時に於て、目下現金不足の故を以て、此事業繰り延べを爲すが如きは、實に遺憾千萬の次第にて候。殊に目下吹き荒びつゝあり候財界の颯風も一般が期待する程、決して永久には存続せざるものと被存候。果して然らば、此適當なる機會を狙つて、更に第二回拂込みの決議を、株主總會に要求すべく、提案せば、先日得貴意候額面程の現金は、此處半歳を俟たずして、御返済しうるならんと存候。近頃重ね々々尊慮を煩し申譯これなく候へ共、何卒是非一肌御脱ぎ被下候は、已に公表いたし候當社對貴下重役としての責任も、自然相立ち可申かと思考せられ候。即ち左様に、貴下が重役なりと云ふ口實

を唯一の條件として、度々御配慮を蒙り候は、大に心苦しく候へ共、尙退きて、小生等、當初よりの創立者の立場にも、より深く御同情なし被下、至急何分の御返事に預り申度、切に懇願仕候。

草々敬具

二伸 御返事次第御下命の場所に急參辭す處にあらず候毎度參館長 座何卒御令室様にも、可然御鳳聲願候

女性に與へて交際を求る書翰

著

者

男女七歳にして席を同うせずなどは、化石せる道學者などの話です。男女同権といへる政治上の近代的標語も結構ですが、室内的な

婦人に交  
る手紙を求む

筆力催眠術の秘傳 一〇四  
る、一切に於て内的なる女性を、もつと解放して、新しい空氣。自由の境地におくと云ふ事は、文化生活の第一義であります。賢明なる、逸早く覺醒なされし貴嬢の如きは、已に萬々御承知の事と存じます。

かの青年と、若き女との會合、接近に對し、危險性を帯ぶなど云ふ、老人級などもあり、又其れを以て、野合媒介の素因を作り、此結果に風紀の紊亂が生じる等の、當局者の四角い心配も、さる事ながら、互に諒解を有つ男女が、互に新思想に活きる男女が、折々其等の意見交換の爲に會合し、そして提携して、小さくても一種の革新運動——文化運動の急先鋒たるが如きは、刻下の急務であると信じます。世間通有の誹謗の如き、世間幾多の没分曉漢のおせつかいの如きは、

此際馬耳東風にきゝ流して可然と存じます。何卒々々、御多数同主義、同趣味——共鳴せるお友達お誘下され、日を期し、處を期し、清新なる、男女の模範的會見が致たうぞんじます。只管期待せるやうな、貴嬢の若やいだ血の高鳴りを、禁じえざるやうな、御返事に接する事を、つつしんで待ちます。

詩集を友に送る書翰

者

者

相變らず詩の生活が忙しいだらう。塵埃でも、土塊でも、馬糞でも、猫の屍骸でも、美化して、詩にせなくば、承知の出來ぬ兄ゆる、今頃は犬糞などの美化中でないか。即ち兄を喜ばすべく、近頃賣り

詩集を友  
紙に送る手

催眠的古今の名文

出しの新人〇〇〇〇の詩集、『秋風』一部を送つて、兄の詩生活の將來にさちあれかしと祈らう。

友の起草せる宣傳文の批評

著者

何事にも、宣傳流行り、時代の要求か、何かは知らぬが、長生すれば、いろ／＼な事につかる。足下も此御多分に洩れず、宣傳文起草を頼まれたさうで、批評御求めであるか、若し挿畫がないとすれば、もつと説明的にしたい、挿畫若しありとせば、もつと文字數を減らして、字句の銑鍊が必要だらう。其んな顧慮に、大分頭を痛め、苦心の痕もあるが、何人にも共通普及が、此〇〇〇。宣傳の生

宣傳法批評  
の手紙

命だから、も少し努力を加いてはどうか。足下の文わるしとの意味では毫頭ない、足下の案、無能率と云ふわけでは決してない、要は岡目八目式缺陷補充の老婆心からだ。宥して呉れ給へ。

よいウキスキーがあるから、晩涼を趁うで、テクシーでやつて来る事を待つ。

即席筆力催眠術秘傳(終)



活即用席  
眼力催眠術秘傳



添眼筆りす册傳眠眼  
附術力し竺には術力  
すに催もな別秘催

序  
文

諺にも「眼千兩」と云ふ。又紫電稜々人を射ると云ふ、若くは眼力非凡と云ふ、天下の英雄眼中に在りと云ふ、或は又眼中人なしといふ眼界千里といふ、巨眼炬の如しといふ、眼光紙背に徹すといふ。何れも皆眼力權威の無限大を眞理として、永遠に語る處の語句である。

眼力催眠術は、則ち此權威ある眼の催眠術を、學理と實驗より説くべく、英雄の涙を説き、美人の美眸を説き、記者の目を論じ、刑事眼を叙し、若くは科學を術的に叙説する等、要は常識的眼力催眠と、組織的眼力催眠とを區別的に一本にせるものである。

排日問題の論議喧しく飛電刻々急を告げ、内外の風雲漸く卷舒せ

んとする大正九年

秋季皇靈祭の翌日

著者しるす

活座  
即用  
眼力催眠術秘傳

目次

- 第一節 一種の眼力催眠術……………一  
英雄人を睨み殺す——悪人は人を仰ぎ見ず——常識で心を読む
- 第二節 思想の移轉……………四  
豫備行爲——暗示——凝視催眠法
- 第三節 眼力催眠練習法……………六  
王陽明の數息觀——刑事の眼——視覺催眠——法官の眼
- 第四節 讀心術(其一)……………九

處世上最大條件——眼の聯合運動——讀心術は按摩の杖——露  
人の諺

第五節 讀心術(其二).....三

完全なる觀察とは——稻妻の如き鋭き放射

第六節 眼力應用の催眠.....一五

望看催眠——視睡催眠——線光催眠——非常手段——眼力教育  
の要

目次(終)

活座 眼力催眠術秘傳

帝國催眠學會

第一節 一種の眼力催眠術

眼力催眠といへば、非常に事實がむづかしくなるが、つまり眼の偉  
大な力、其力が催眠術になり、又催眠術であると云ふのである。例へば  
「眼は口程にものをいひ」と云ふ事でも、「眼千兩」と云ふ事でも「蛾  
媚秋波」と云ふ事でも「諸國諸大名弓矢で殺す、娘十六七眼で殺す」と  
云ふ事でも、更に近代語で、無線電線を交すと云ふ事でも、悉く眼力

一種の眼力催眠術

英雄人を  
睨み殺す

眼力催眠術秘傳

催眠術の一種である事を、斷言して憚らない。  
古への豪傑は、よく敵を睨み殺したものだ。又花柳界の婦人などは、直に眼に媚びを呈して、少しく爲になりさうな客と見れば、盛んに無線電信をかけて暗示をし、さうして徐ろに降服、情意投合の實を擧げるといへるも、柔と剛の區別相違はあるが、皆眼力能率の形容であり、又一種、催眠術の應用であるなどを見ても、少しく注意して、研究すれば、人間の眼力は催眠術應用を以て、國家、社會を益し、其人個人の幸福を増大する事が出来る。しかしながら、此爲に、眼の瞬きを頻繁にして、所謂「眼の色が尋常でない」を、他から言はれる迄、輕卒なる行動をしてはいけない。要するに時と、場合を考へて、かゝる場

悪人は人  
を仰ぎ見す

合なれば、之を行つて有効なりと云ふ確信の浮んだ時、泰然として其術を行ふ事が肝要だ。

我國在來の習慣としては、人を採用するにしても、罪人を糺彈するにしても、先づ其眼光を見て、其胸中——其心の奥底迄看破しやうと試みる。然るに之が又、大抵の場合に成功する。と云ふのは、兎角わるい事をしたものは、堂々として對手を仰ぎ見る事が出来ないと共に、よし仰ぎ見えても、其眼の視力が、頗る弱々しい。さうして少し強度に睨みかへされたが最後、一耐りもなく俯いてしまう。之れ又眼力催眠の一種であつて、眼中には、複雑極まる心中の心象が悉く、反射する。而かもそれが、其人の動作に現れて、何處となく沈着を缺く。即ち其處を利用して、糺問の第一矢が放たれる、さうして尙矢繼早に放

常識で心を讀む

つ矢力が、遂に眼力——態度から其人の新舊罪を刎抉し、法官、警察官等の勝利を得る事が少くない。昔の町奉行所などでも、奉行は先づ「余は越前であるぞ、……面をあげよ」といつたものだ。さうして常識で先づその心を讀む、それは眼光から出發する。斯様にして過去の眼力催眠術は行はれた。

### 第二節 思想の移轉及催眠術練習

以上を更に理論方面からいへば、自己の思想を、眼力から眼力へ移轉さして、さうして思想の交換をする、乃至は其力を活用して對手を征服し、又は壓伏してしまふ。此組織だつた方法手段を假りに「術」と名づけてある。已にアートである以上は、唯單に常識力で其れをする

豫備行爲  
——暗示

凝視催眠  
法

位の事ではいけない。先づ其豫備行爲として、對手に暗示を與へる事、通常催眠術の如くする。さうしてから凝視催眠法を施す。即ち視力を一點に集中し、堅く觀念の眼を開いて居る時、又之に思想の移轉を命令し、さうしてがら、意志の聯合統一を實施する。つまり其暗示は、術者を凝視すべく餘儀ない意味の暗示であつて、勿論その術者を信用する者でなければ、効果は少い事になる。それ故術者は、出來うる、丈威嚴を保持して、被治者に輕蔑をうけぬやうの用意が要る。かくて、被術者をして、なるべく眼瞼を大きく開けて、ある物體を見凝めて居らすべく、その距離を五尺六尺位おく。それが原則である。かくの如くして、術者は、被術治を自己の意の如くせしむるのであるが、之を凝視催眠法と稱してゐる。

思想の移轉及催眠術練習

### 第三節 眼力催眠練習法

此催眠術の練習をするには、被施術者の體を、力めて安靜にさせ、又寝かすなり、座するなり、椅子に倚るなり、随意の姿勢をとらしめる。次に此催眠用の凝視球を、眼から一二尺の位置に垂下する。さうして練習者は、一心にその凝視球を注目し、かくて閉目して、自己の吐く息の數、即ち呼吸をいろ／＼に算へて見る。所謂是れ王陽明の數息觀に近いものだ。陽明は此方法を以て精神統一を企てた、それから又開眼して、凝視球を見つめる。此くの如くして初めて、眼が催眠術に馴らされる。さうして催眠術をなす處の威力ある、眼力が養成される。故にしかく、一つの慣習を生じたる人の眼力は、時と處と

王陽明の數息觀

を問はず、容易に術者となり、對手を眼力一つで惱殺し、又はチャームせしむる事が出来る、つまり新聞記者の眼力。擊劍者の眼力、裁判官の眼力、刑事の眼力等の精——を、集約して、大成したのが、所謂催眠的眼力になる。

次は思想の移轉であるが、之は五官の媒合なくして、施術者の思考觀念——感情——及感覺を、被術者に移轉させる事のいひである。

例せばその人が、社會主義者中の極端者で、その人の存在が、國家の安寧秩序を害すると認められた時、術者は術を以て、其者の惱裏から、其思考——其思想を移轉させる事が出来る。即ち其方法は、第一に施術者に、視覚催眠をかけておく。そして術者が一向專念に、ある思ふ事、施術者に移してよい事を考へて居ると、不思議に此思考せる事が、不

刑事の目

視覚催眠

眼力催眠練習法

知不識の間に、施術者の脳裡に移轉する。恚うして在來の思想を驅逐する。眼力催眠の能率も、亦偉大極まるではないか。ついでに呉れ呉れも斷つておく事は、施術者より術者が、輕蔑されてゐないと云ふ事が、此術の分れ目、成功——失敗になる。

次は意志の聯合——統一であるか、約めていへば、術者と、被術者の心理的關係である。つまり相互双立關係でなければいけない。例へば暗示をうけた被術者は、其暗示をうけた術者でなければ催眠しないと云ふ事實が其れである。

然らざれば、何人の暗示に依ても、往々にして輕々行動して、種々の幻想を生ずるからである。

#### 第四節 讀心術 (其二)

讀心術は、讀んで字の如く、人の心を読む術の謂ひである。其の人がどう云ふ考へを抱いて居るか、若くはどんな野心を有して來てゐるか、乃至は如何の目的の爲に訪ねて來たかを、其人と相對して對活するに先たち、先づ知る事は、對手上、交際上、處世上、實に最大の條件である。しかしながら、人は神でない、萬能力も、神通力も有してゐないから、尋常の考へや、普通の想像力を以てした位では、それが分らない。

處世上最大條件

眼の聯合運動

處が少し研究し、少しく工夫すれば、少しく注意すれば、次第に其出來ぬ讀心術が會得されて來る。其れは則ち「觀察」である。つまり眼



で見たる事を、心で察して定める——心と、眼の聯合運動——一種の共同作業といつたやうなものである。が、此第一の役目を爲すものが眼であつて、眼の働きにして、第一に正鵠を失つてしまへば、第二の心の察し力は、更に威力のない者になる。眼の力を信じ標準を定め、斷定を與へるのだから、眼主心従といふべき關係で、讀心術では、どうしても眼が主人公の役目——重大なる役目を有つて居る。

讀心術——眼主心従——其處に觀察が生れる。觀察はつまり按摩の杖の如きものである、不意にもものに衝突し、不意に溝渠へ陥落せぬ爲の要心である。又之を軍隊に見立つれば、本隊に對する前衛の如く、前衛の最前列に、飛び放れて警戒行軍を爲す前衛尖兵の如きものである。要は不意の敵襲を受けざらんか爲の用意である。其れで同じく人

讀心術は按摩の杖

生には、他から不意の要撃をうけないやうな用意が要る。殊に切迫しきつた、今日のやうな、強肉弱食の烈しい時代には、尙の事對手の心の中を、用談に入る以前出來得うるなれば、未だ逢はざる前に讀んてかゝつて、其れから安心して對話する程の戒心なくば、今は普通以上の成功が覺束ない。ばかりではない、此要心、此用意にして缺かばその人は社會の落伍者になり、人の下積み生活をする事になる。恚うなつて來ると、讀心術の前提とも云ふべき「觀察」が急に怖しいやうな、又頼母しいやうな、必要無二、緊切重大なるものになつて來る。さうして此に第一線に立つ、眼の役目の、輕視する事の出來ぬ事が知れる。

露人の諺

露西亞の諺に「觀察力のない人は、深林を過ぎてても新材を見出

讀心術(其一)

さぬ」と云ふのがあるが、此諺は唯り露西亞ばかりでなく、我日本にも、その他の諸國にも適用が出来る。此意味に於て觀察力のない人は、春風洋々の櫻花の下を過ぎて、何等の感想も浮ばず、又涼風習々たる新緑の樹蔭に對しても、何等の感想も起らず、又或は秋月皎々として白露江に横る良夜を見ても、冬嶺孤松秀いづる寒天地の光景を眺めても、何等特殊の感想が湧かない。随つて勞働者の同盟罷業騒ぎがあつても、米の暴動事件が擡つても、選舉戰に於ける政黨の政争が激甚を極めても、何等特殊の觀察がないに相違ない。つまり之が注意力の不足と云ふ事になる。さうして觀察には注意力を要すると云ふ必須の條件が、遂に附帶する譯になる。かくて、初めて、觀察力が、鬼に金棒になる。

### 第五節 讀心術 (其二)

即ち鋭き觀察——眼から鼻へヌケるが如き觀察は、注意力の如何に依るものである。しかし觀察は、單に鋭いばかりではいけない、深さを伴ひ、徹底を伴ひ、正確を伴ふて、初めて完全と云ふ事が出来る。

其れにつけても、矢張り、第一線に立つ眼の力か、逸早く、對手の空隙から覗いて、其れを間一髪の間に見とつけて、これを極めて機敏に心に傳へる。つまり、眼から對手の眼を見て、同時に其心を看破する。眼——眼——心である。此聯關的活用から「讀心術」が生れる。

此讀心術は、學者と、無學者を問はずに出来る。學問の有無の如き

完全なる  
觀察とは

は、さまで深き關係がないと云つてよろしい。其方法は、先づ眼から眼へ、稍光の如き鋭い放射を送つて、心を看る時、同時に其態度をも顔色をも合せて見る事が必要である。さうして其れを、豫め想像せる概念へ、逸早く其結果を結びつけて決意を示す事にする。随つて順序として、どんな顔色、どんな態、どんな眼の色に、喜びを含めるか、怒りを帯べるか、又悲しみや、憂ひを有つかを考へたり、さうしてそれが求める心であるか、訴へる心であるか、誇る心であるか、欺く心であるか、謀る心であるか、搜る心であるか、装ふ心であるかを考へたりして、讀心術と名づける迄に、種々の準備的試練が要る。

其處で平生から、仔細に注意して絶えず此等の一つ一つに就き、少くとも一事二三回宛の試練をした末に、自己の試練の巧拙を確めた上、

初めて其綜合智識、初めて其聯合智識の集約力を擧げて、觀察——讀心術を行へば、眼力催眠術同一の巧率が必ず擧つて來やう。

### 第六節 眼力應用の催眠

尙眼力應用の催眠術を擧ぐれば、別に「望看催眠」と云ふのがあり「視瞳催眠」と云ふのがあり又「線光催眠」と云ふのがあり。先づ望看催眠から述べやう。

即ち斯術の第一は「顔面法」「複式球法」及「指頭法」の三種であるか、要は術者が被術者に對して、あるものを見せしめて催眠せしむる處の特殊手段である。今それ等を、一々簡明に説き見る。

#### (一) 顔面法

術者「私の顔をよく見て居なさい」

被術者「無言で其の通りになる……」さうして、次第にうつと●となる。

術者「眼を閉ちて眠れッ……尙づつと深く眠れッ」と繰返す。

すと、此術半ばに催眠するものがあり、最も終りに臨んで催眠するものがある。

(二) 複式球法

之は古谷鐵石君が専用してゐるらしい。此球と云ふのは、實用新案の「催眠術用複式球」である。短時間にして、眠らんと欲すれば、球を被術者に近づける、即ち眼に近づける。又長時間を費して眠らせん

と欲すれば、眼から一二尺離して看せしむる。又突急に効果を見せんとせば、球を被術者の眼から、四五分放れた處に近づけ、眼を出来る丈大きく開かせ、眼瞼を緊張させて眺めしめた上、其球に微動を與へる。又上下に二寸位動して、球を眼から四五寸も離し、又近づけたり、又は眼か今に全く閉づると云ふ迄、それをいろくにして見せる。さうしておいて「眠い〜〜」と云ふ、最後の暗示を與へて、大抵は目的か達せられる。

(三) 指頭法

之は被術者をして、術者の指頭に注目せしめつゝ眠らす法である。其法は、先づ術者の左手の人指を伸ばして、他の四指を悉く被術者の額上におく。そして人指をその兩眼の中央部において、被術者に眺め

しめる。又は術者の左手の人指を伸し、他の四指を握り、其の人指頭を被術者の两眼中央部の邊へ向けて伸ばし、そしてそれに注目せしめつゝ、目から二三尺放して遠ざけたり、或は又四五分の處へ持ちゆき、かくする事兩三回の後、更に指頭にて徐ろに小圈を描きながら、遠く、近くそれを示し、其れを又中止せしめ、次第に上下し、眼を細く、又閉眼せしむる等一種の暗示を與ふる時は、大抵其目的を達する事が出来る。

望看催眠

第二の「視瞳催眠」は、被術者をして、術者の眼の瞳孔を凝視せしめて眠らす催眠法である、此方法を實行せんとすれば、光線を被術者の後頭部近から誘導して、其處へ寢すなり、坐せしむるなりする。そして、其れに術者が對坐し、此距離は約二尺位。此場合に於て被術

者は術者の两眼の瞳孔を眺め、之に反して術者は被術者の两眼の中央の邊を望み、そして「眼を閉ちて眠れ」と云ふ暗示的言語をかける、即ち催眠誘致の暗示である。

又以上を椅子式にて行ふ事も出来る。此對する距離三四尺位、即ち術者も、被術者も、互に其瞳孔を凝視してゐると、程なく被術者の眼球がすわつて、涙ぐむ。之を見るや、否や、術者は「目を閉ちて眠る」と誘眠的暗示を與ふる。

之で大抵の被術者が催眠つてしまふ。しかしながら、此方法は、術者の膽力如何によつて可能であり、何人にも可能であると云ふ事は、保證しえられない。殊に此催眠中注意すべきは、術者は必ず被術者を見るに、其鼻上又は两眼の間のみを凝視する以外、何處を見てもわるい

線光催眠

事、況んや輕々に周圍を濫視する事の、よりわるいと云ふ事である。

第三は『線光催眠』であるか、此催眠法は、一種の光線を利用する催眠であり、いひ換へれば色彩應用の催眠であり、色彩を以て光線を以て眼力を變化せしむる處の催眠である。

之を行はんとせば、又術者のその室へ、藍色の幘を垂れ、電燈にも藍色のホヤをかけ、若しその他燈火なれば、同じく藍色に見えるやう装置をし、そして藍色の室にしてしまふ。即ち此意味は、被術者をして沈靜して、眠に誘導すべく、藍色が一番に適當だからである。其處で先づ此装置が出来たとして、眞暗き其室内へ、術者は被術者を連れ來り、其處へ仰臥させる。さうして下へくと體を撫しつゝ、例の通り誘導暗示をかける。

非常手段

然らざれば、被術者を、突然此暗室へ連れ來つて、マグネシヤに點火せる、其強烈なる光線で刺戟を與へ、さうして硬直状態に入らしめる。けれども、多くの場合、暗室へ突然被術者を連れ入れる事は、種々の不安を與へるから、成るべく丈避けるほうかよいのである。つまり暗室の突然施術は、要する非常手段と見てよろしいものだ。

つまり此催眠原理は、前にのべし、望者催眠と、同一理法であつて、光線力應用より、被術者の眼力を、一點に集中せしめ、さうして目的を達する處の、一種の眼力催眠と見るべきものである。

兎に角、眼力催眠の要領は、大略以上の如きものである。つまり此の如き方法により、此くの如く實行せば、而して此練習を積みめば、其熟達に依て、神通力に近い、一種の靈動力を、目前即座に示す事の出

來ると云ふ説明が、つまり本篇の大使命である。  
 之を要するに、天稟の視力を、より訓練して、即ち眼力教育を施して、更により鋭く、更により有効に、更により公益に善用する事の手段が、遂に——眼力催眠術になつた譯である。

即座活用 眼力催眠術秘傳 (終)

大正九年十二月十日印刷  
 大正九年十二月十五日發行

定價金壹圓貳拾錢

不許複製

著者 帝國催眠學會

發行者 柳川敬

印刷者 百目木智璉

發行所

東京市本郷區  
 駒込曙町十三番地

富國社出版部

振替東京四五七四三番

287  
019



終

